LOP67　　2023.3.4

Lausanne Occasional Paper: Jewish Evangelism

ローザンヌ運動特別報告書６７　ユダヤ人伝道

本 PDF は、現在インターネット上に公開されている文書の日本語訳です。「はじめに」にも紹介されている 2004 年の旧バージョン LOP60 は、近藤宏子氏の翻訳により 2006 年に関西ミッション・リサーチ・センターから出版されました。LOP67 は、ユダヤ人伝道に関する最新情報をまとめた広範な内容となっています。各章タイトルの下の 英語本文へのリンク をクリックしていただきますと、対応する英文ページにリンクされます。

本翻訳文や、内容の不明点に関しては、ＬＣＪＥ日本支部までお問合せ下さい。
なお、本ＰＤＦは作業の中間段階であり、５章までの全訳が完了した段階で、用語の統一、見出しの文言調整、ページ建てや書式の調整などを行う可能性があります。本書を論文などに引用される場合は、内容が微妙に訂正される可能性があるため、ご注意ください。

ＬＣＪＥ日本支部（ローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会日本支部）
〒541-0041 大阪市中央区北浜 2-3-10 VIP 関西センター3F
電話：072-867-6721 FAX：072-867-6721　　E メール: lcje1226@gmail.com
ホームページ: https://www.lcjejapan.com/　　郵便振替: 00950-4-25633

ＬＣＪＥ日本支部では、東京、大阪、およびオンラインで月例の祈祷会を開催しています。どうぞご参加ください。

英語本文へのリンク

全体目次

はじめに：なぜユダヤ人伝道なのか？　（2022.5 田中身和子　翻訳）
第１章：ユダヤ人伝道の歴史　（2022.12 田中身和子　翻訳）
第２章：ユダヤ人コミュニティとユダヤ人伝道　（2022.2 田中身和子　翻訳）
第３章：神学的考察とユダヤ人伝道　（2022.3 石井田直二　翻訳）
第４章：ユダヤ人伝道に対する１０の反論への応答　翻訳中
第５章：ユダヤ人伝道における戦略と実践　翻訳中
参考文献：さらに学びを深めるために － リッチ・ロビンソン博士

２０２３年４月中の完了を目指して作業中です。

はじめに：なぜユダヤ人伝道なのか？

ーボディル・スキヨット　&　ダン・セレッド
ローザンヌ・ユダヤ人伝道　ケータリスト

1980 年、「未宣教の人々への宣教」に焦点を当てたローザンヌ世界宣教委員会（LCWE／今日ではローザンヌ運動と呼ばれる）の会議がタイのパタヤ市で開催されました。この記念すべき会議の多くの成果の 1 つは、福音がまだ届けられていない民族の一つであるユダヤ人にその福音を届けようとするネットワークの誕生でした。このネットワークはローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会（LCJE）と呼ばれるようになりました。LCJE はローザンヌ運動内の様々なネットワークの中で最も長く活動しているネットワークです。

2004 年、ローザンヌ運動は世界に福音を届ける使命に焦点を当てた別の会議を開催しました。この会議で LCJE ネットワークのメンバーは「Lausanne Occasional Paper 60、Jewish Evangelism：A Call to theChurch」（LOP60）という報告書を作成しました。その後、この報告書は、ユダヤ人伝道の重要性を世界の教会に知らせるために、広く用いられました。この文書では、使徒パウロの言葉である「私は福音を恥じていません。それは、信じるすべての人、最初にユダヤ人、そしてギリシャ人にも救いをもたらす神の力だからです」（ローマ 1： 16 私訳）を受けて、救い主であるイエスの福音をユダヤ人とすべての人々に伝えるように、世界の教会に勧めています。LCJE の主張は「イエスがユダヤ人のメシアでないなら、諸国民のキリストではありえない」ということです。イエスが世界の救い主であるなら、ユダヤ人の救い主でないはずはありません。

私たちがこの報告書を執筆した 2020 年は LCJE の 40 周年を迎える年でした。過去 40 年間、このネットワークを守ってくださった神の忠実さをどのように記念し、回顧していくかについて祈った結果、私たちは LOP60 の改訂に取り組むことに決めました。2004 年以来、世界が変化する速度は急激に速くなっており、ユダヤ人伝道における変化もその例外ではありません。LCJE が世界の教会の中で適切な声を発信し続けて行くために、私たちは聖書の時代から続く不変の召しを再確認すべきです。それは「すべての国民を弟子とする（マタイ 28:19）」ことであり、それには当然、ユダヤ人も含まれるのです。

この長い報告をお読みいただけることに感謝します。あなたがこの文書を読んでいるのは偶然ではなく、むしろ、神の意志であると私たちは信じています。あなたはユダヤ人のミニストリーに精通しているかもしれませんし、ユダヤ人がイエスを必要としている、またはユダヤ人がイエスを信じているという話を聞くのは初めてかもしれませんが、神がこの報告書を用いてくださって、神の王国が進展し、神の御名に栄光がもたらされることを祈ります。

多くの人々がこの文書作成のために献身的に貢献してくださいました。このプロジェクトを始める時、可能な限り多くの人々に関わっていただきたいと願っていました。それは、LCJE のネットワークの中の意見の多様性を反映すると同時に、私たちを一つ結びつけるものを明確化するためです。それは「イスラエルの失われた羊の救いへの情熱」です。各章に編集者を割り当て、LCJE 内のさまざまな見解を収集し、それらを 1 つの文章にまとめていただくように依頼しました。簡単な作業ではありませんが、編集者の皆さんは、すばらしい仕事をして下さいました。ご苦労いただいた、アレックス・ジェイコブ牧師、トゥヴィア・ザレツキー博士、ダレル・ボック博士、リチャード・ハーベイ博士、スーザン・パールマン姉、リッチ・ロビンソン博士に感謝の意を表したいと思います。

私たちの祈りは、あなたがこの文書を読んで行動を起こされることです。どうか神がユダヤ人の救いのために祈り、執り成す心をあなたに与えてくださいますように。あなたは福音を必要としているユダヤ人をご存じかもしれません。もしそうなら、救い主イエスを通して人々に与えられた神の恵みを、その方と分かち合うことをお勧めします。ユダヤ人伝道に従事することは教会に与えられた召しです。私たちの働きによって、教会が行動を起こすことを願っています。

主の栄光のために

2022 年 5 月 18 日改
（日本語訳：田中身和子）

第１章：ユダヤ人伝道の歴史

—アレックス・ジェイコブ牧師

英語本文へのリンク

本章ではユダヤ人伝道の歴史的な背景を説明します。次章からは、ユダヤ人伝道に関する多元的な議論に入り、ユダヤ人コミュニティとユダヤ人伝道（第２章）、神学的考察とユダヤ人伝道（第３章）、ユダヤ人伝道に対する１０の反論への応答（第４章）、ユダヤ人伝道における戦略と実践（第５章）を取り上げます。

第１章はユダヤ人伝道に関する歴史的な概観です[1]。伝道は長い宣教の歴史の中に含まれており、また宣教は教会の歴史の一部となっているため、ユダヤ人伝道の歴史は大きな主題です。教会史は二千年以上にも及んでおり、ミッシオ・デイ（神の使命）という大きくて重い任務を担って、それに参画した教会が、世界のあらゆる地域に影響を与えました。しかし、本章では初代教会に重点を置き、伝道の基本原則を考えつつ、ユダヤ人伝道の基本的な特徴を明らかにします。それは、さらなる祈りと共に歴史的研究と神学的考察、実践のための有用な「足がかり」を与えるためです。

イエスの伝道と初代教会の伝道実践

ユダヤ人伝道は歴史的、神学的に言って最初の伝道の領域であり、それは後に教会によって行われる、あらゆる伝道の取り組みを生み出した出発点です。イエス（ユダヤ人の信仰共同体では一般的にイエシュアと呼ばれている）が最初に弟子たちを召された時、その召しには弟子としての自覚とイエスの証人となることに明確な焦点がありました（マタイ 4：18-19）。さらに、イエスは地上での活動を終えるにあたり、再びすべての弟子たちに宣教を呼びかけられました。（マタイ 28:18-20）

> イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」[2]マタイ 28:18-21（新改訳）

伝道の歴史において「大宣教命令」と呼ばれるこの教え（召命）は、何世紀にもわたって教会の使命と働きを形作り、力を与えて来ました。ここから、イエスの証人となることの重要性を知り、また「伝道命令」が、どのように聖書に根差し、教会の実践によって展開して来たかを学ぶことができます。
ユダヤ人に福音が伝えられて教会が始まり、間もなく宣教は世界に拡がって行きました。教会史の初めは、「ユダヤ人のキリスト教」しかありませんでした。福音のメッセージはユダヤ人の聖書の世界に根ざしており、イエスはユダヤ人であり、使徒たち（そして生まれたばかりの初代教会の共同体も）は主にユダヤ人を対象に活動しました。彼らの働きは「素晴らしく新しい」画期的な変革であり、過去との断絶、新時代の幕開け、来るべき王国の新たな現実として宣言され、示され、確立したのです。しかし、イエスの教えと新約聖書の広範囲の教えからは、別の側面も見ることができます。それは、福音のメッセージが神の忠実を示す継続的な啓示の延長線上にあることです。イエスの働きは神の約束と預言に根ざしており[3]、神の忠実はイスラエルとの契約の歴史から、さらに天地創造の時にまで遡るものなのです。

福音書に記されたイエスの宣教活動は広範囲にわたる重層的なものですが、簡単に言うと、彼は神の国を宣べ伝え[4]、イエスの弟子となるように人々を招いたのです。弟子の道には多くの段階がありますが、新約聖書は４つの段階、つまり①悔い改め、②イエスへの信仰（信頼）、③洗礼、そして④聖霊の人格的な働きを受入れる態度を強調します。

王国はメシアが「王」であるというメッセージであり、弟子の道はその適用でした。王国や弟子の道は、第二神殿時代のユダヤ教の歴史と神学的な文脈において、最も良く理解できます。[5]教会の第一世代のイエスの弟子の大多数はユダヤ人であり、使徒 6:7 と 21:20、ヤコブ 2:2[6]が断言するように、多くはユダヤ人の宗教的構造の中に根付いた人々でした。教会はこのユダヤ人の世界の中で生まれて成長を始め、新たにイエスの弟子となった人々は信仰深いユダヤ人としての正統性を主張しました。伝道はこのユダヤ的文脈の中で行われ「神の契約に対する忠実」というユダヤ的な聖書理解の中で理解されたのです。

しかし、伝道はユダヤ人の中に長くは留まりませんでした。イエスを信じるユダヤ人たちが聖霊によって力を与えられ、非ユダヤ人（異邦人）の間で証をし、イエスが与えた大宣教命令（マタイ 28：18-20）が実現して行ったからです。伝道者たち（そのほとんどがユダヤ人）はユダヤ人の世界を超えて福音を伝えた事で、彼らの伝道活動とイスラエル民族の不変の召命が結びつきました。それは、イスラエルが諸国民の光となり、神の救いを地の果てまで届けるという役割だったのです。（イザ 49：6）[7]。

「使徒の働き」は、宣教がエルサレムから始まり異教徒と異邦人世界の中心であるローマで使徒パウロが証をするところまでの記録です。それは、ユダヤ人の世界から異邦人の世界への架け橋[8]であり、続く新約聖書の書簡の多くの箇所は、「教会」の多様性が高まる中で一致を喜びつつ保つための諸問題を扱っています。それはユダヤ人と異邦人が共にイエスを主と仰ぎ見て仕えるためなのです。
教会がユダヤ教世界という枠組みを越えて拡大した時代について、歴史が明確に示しているのは、拡大の著しい速度と、その壮大な規模です。キリスト教の歴史家であり神学者である N.T.ライトは以下のように書いています。

> 初期キリスト教の最大の特徴は、目覚ましい速度で成長したことです。AD25 年には、キリスト教は存在せず、ユダの荒野に住む若い隠者と、夢を見たり幻を見たりする彼のいとこがいるだけでした。ところが AD125 年には、ローマ帝国がキリスト教徒を処罰する公式な政策を定めるに至り、ポリュカルポスはすでにスミルナで半世紀もキリスト教徒でした。アリスティデスは（早い年代を受け入れるなら）ハドリアヌス帝に対し、世界には蛮族（未開人）、ギリシャ人、ユダヤ人、そしてキリスト教徒の 4 つの人種がいると告げていました。また、後に殉教者ユスティノスと呼ばれるようになる若い異教徒は、哲学的探求を始めて異教徒の偉大な思想家を巡っているところで、まだキリストに辿りついていませんでした[9]。

キリスト教とユダヤ教の「分岐点」とは？

初代教会が始まった頃、イエスを信じるユダヤ人の信仰共同体は、他のユダヤ人たちから（ローマ当局からも）ユダヤ教内の「一派」あるいは「運動」と見られていました。それは、イエスを信じるユダヤ人の多くが、ユダヤ教の重要な習慣や信仰を維持していた一方で、ユダヤ人社会の方でも多様なユダヤ人グループとアイデンティティが共存していたためでした。この多様性を表現するために、単一の宗教を意味する「ユダヤ教」（またはラビ的ユダヤ教）ではなく、当時のユダヤ教を「第二神殿ユダヤ宗教群」などと呼んだ方が良いかもしれません[10]。

ラビ的ユダヤ教とキリスト教が、制度的にも神学的にも別の宗教となるまでの道のりは複雑であり、「分

岐点」となった瞬間や出来事があったわけではありません。使徒言行録にはすでにシナゴーグで福音のメッセージが拒絶された記録があり、その後のエルサレム陥落（AD67-70）、バル・コクバの乱（AD135）に至る様々な展開の結果、イエスを信じるユダヤ人（および教会）とラビ的ユダヤ教との境界線はより明確に、広く認められるようになりました。教会の信徒たちが「より異邦人的」になるにつれてイエスを信じるユダヤ人の正当性を認めなくなった一方、ラビ的ユダヤ教の方でもユダヤ教の信仰と実践を再定義し、イエスを信じる人々の正当性を拒否し始めたことで、その分裂は拡大し、溝は深まったのです。

その結果、教会は聖書のルーツや新約聖書の実践からますます離れるようになりました。福音の真理と美しさは、2世紀以降の思想と実践の型にゆっくりと流し込んだかのように微妙に変形され、キリスト教はユダヤ人の生活とは異質のものとして再定義されたのです。それは、教会とラビ的ユダヤ教との間の「アイデンティティ争い」に基づく対立の激化をもたらし、聖書の啓示の真の保持者は誰か、誰が真に「神に選ばれた民」なのかをめぐり、多くの議論と幅広い論争が（両者から）起こりました。迫害されていた教会は、迫害する側に回り（コンスタンティヌス帝後の時代）、キリスト教が得た有利な新しい地位や権力は、キリスト教徒とユダヤ人の間に存在した相互の関係を変質させるように働きました。

「分岐」が起こった理由やその解釈をめぐっては、多くの論争の歴史があります[11]。しかし、はっきりしているのは、最初はユダヤ人伝道が続けられ、ユダヤ人信徒たちも活動を続けていたのに、4世紀末になると、教会内でユダヤ人信徒がアイデンティティを保ち、共同体として活動した明確な記録が無くなってしまうことです。つまり、教会とラビ的ユダヤ教の分離はほぼ完了したのです。キリスト教を標榜する教会はユダヤ教とは別の宗教とみなされるようになり、イエスを信じるユダヤ人信徒たちは誤解されたり、時には教会とシナゴーグの両方から迫害を受け、疎外された集団となりました。

この「分岐」はユダヤ人伝道を新約聖書の原型から変質させる結果を招きました。教会がイスラエルに代わり「神の選民」となったとする置換神学の影響が強まった結果、ユダヤ人伝道の呼びかけは、まるで「宇宙人の叫び」のように、誰も聞かなくなってしまったのです。
置換神学が発展した背景には多くの要因がありました。ヘブライ的世界観からギリシャ的な思考方式への移行、反ユダヤ的な意図、そして権力の悪用などです。そして「イスラエルの希望」は捨て去られて行きました。それにもかかわらず、イエスを信じるユダヤ人信徒たちは教会の歴史のどの世紀にも見られました。彼らの存在は、教会とシナゴーグの双方に、神の忠実を認識させる証しとなったのです。

新たな始まりと召命の更新？

宗教改革は、教会の一部に、聖書の教えに対する愛と献身を呼び覚ましました。クリスチャンが聖書を（多くの場合に初めて母言語で）読んで、その聖書のメッセージに思いを巡らせるようになり、精神と心が様々な面で刺激を受けたのです。明白な召しを受け、新しく力強い方法で伝道と幅広い宣教に従事する人々が現れました。その中で、諸国民の間に散らされたユダヤ人に福音を伝える動きも起こって来たのです。彼らのユダヤ人への関心は、しばしば親ユダヤ主義（philosemitism：反ユダヤ主義の反対語）を伴っていました。その核心は、ユダヤ民族が生き残り、再生し、回復することが御心だとする神学的信念だったのです。

ユダヤ人に対する新たな関心とその根底にある親ユダヤ主義を、全ての宗教改革者が本質的に、あるいは共通して持っていたわけではありません。マルティン・ルター（1483-1546）がユダヤ人に対する批判論[12]を展開したのは、驚くべきことではないのです。宗教改革の歴史と神学書の多くがユダヤ人問題（およびそれに関連するキリスト教の問題）、ユダヤ人のみに焦点を当てた伝道、「イスラエル中心」の終末論などに無関心だったのです。

それでも、親ユダヤ主義と、聖書の継続的な学びは、一部のクリスチャンにユダヤ人国家の回復を祈り求める気持ちを起こさせました。ユダヤ人国家の回復というビジョンは、アンドリュー・ウィレット（1562-1621）、トーマス・ブライトマン（1562-1607）、ピエール・ジュリュー（1637-1713）といった初期の改革者たちの著作や説教にはっきりと見て取ることができます。ブライトマンの著書『彼らは再びエルサレムに帰るべきか』は、彼の死後８年目に出版されましたが、それは聖書の言葉が成就してユダヤ人が聖地に帰還すると、強く主張する内容でした。その主張は先駆的なもので、キリスト教界に広く大きな影響を与えたとされています。

ユダヤ人伝道と、イスラエル回復（主に聖書的終末論的の特定の文脈における）は「基本的な二本の柱」として、多くのプロテスタントのクリスチャンが新しく始めた、ユダヤ人宣教の運動や組織を支えるものとなりました。先駆的な取り組みがドイツで行われましたが、敬虔なルター派とモラヴィア派のネットワークが活用されました。1656 年、エスドラス・エドザード（1629-1708）はハンブルクで、ユダヤ人に対するキリスト教教育、弟子訓練、実践的支援を目的とする宣教活動を開始しました。この活動はフィリップ・ヤコブ・シュペーナー（1635-1705）やアウグスト・ヘルマン・フランケ（1663-1727）など、後のルター派宣教師たちに影響を与えました。

1728 年にハレ大学でユダヤ研究所（Institutum Judaicum）が設立されました。この先駆的な宣教研究所は印刷部門の設置、イエスを信じるユダヤ人への牧会的・実践的支援、巡回するユダヤ人伝道者の任命と支援という 3 つの主要な目標を掲げていました。この研究所は 1791 年に閉鎖されましたが、その後の多くのプロジェクト、たとえば、ヨーゼフ・フレイ（1771-1850）が宣教を学んだベルリンの神学校などを生み出す契機になったと評価されています。ヨーゼフ・フレイは、元の姓はレビで、ラビの息子でしたが、1798 年にイエスを信じるようになった人物です。彼は 1809 年にロンドン・ソサイエティ（London Society for Promoting Christianity Amongst the Jews／LSPCJ）を創設した人物です[13]。
この時代のもう一つの重要なユダヤ人伝道活動は、オランダで 1738 年に始まったもので、それを開始し、指導したのはヨハン・ドーバー（1706-1766）でした。彼の活動は歴史的、神学的に重要なもので、『モラヴィア教会史』[14]にある以下の紹介文から、その活動内容をうかがい知ることができます。

> ・・・ヨハン・ドーバーはヘブライ語の達人でユダヤ人のあらゆる習慣に精通し、ケーニヒスベルクの教授就任を要請されていました。しかし、東洋学者としての栄誉を得るよりも、アムステルダムのユダヤ人街に質素に住んで、友人のユダヤ人たちに彼が深く愛していたキリストについて話す道を選びました。彼の宣教の方法は参考になるものでした。ユダヤ人の友人たちに、いきなり教理や神学を説くことはせず、キリストが預言されたメシアであることを証明しようともしなかったのです。彼はイエスが死からよみがえったこと、よみがえったイエスがこの世でどれほど多くのことを行ったのかを、親切に説明しました。そして、ユダヤ人たちがパレスチナに集められるという希望を語ったのです。彼は「改宗者」を作ったと自慢することはできませんでしたが、ユダヤ人の友人にとても愛され、「ラビ・シュムエル」と呼ばれたのです。

「ユダヤ人のキリスト教」の再出現

新しく興った伝道団体や関連する様々な機関、組織を調べてみると、スタッフの中でイエスを信じるユダヤ人の割合が高く、重要な指導的役割を担っていたことがわかります。この数は 19 世紀を通じて著しく増加しました。［15］この時期の他の貢献者は、ヨーゼフ・フレイの他に、英国国教会司教マイケル・ソロモン・アレクサンダー（1799-1845）、宣教師ジョセフ・ウルフ（1795-1862）、神学者アウグスト・ネアンデル（1789-1850）、詩人アイザック・ダ・コスタ（1798-1860）、聖書学者アルフレッド・エダースハイ

ム（1825-1889）、宣教師フェルディナンド・エヴァルト（1802-1874）、宣教師ヘンリー・アーロン・スターン（1820-1885）、宣教師ジョン・モーゼス・エップスタイン（1827-1903）、作家、雄弁家、宣教師パウルス・カッセル（1821-1892）、上海の聖公会司教サムエル・アイザック・ジョセフ・シェレシェフスキー（1831-1906）、聖公会司教アイザック・ヘルムース（1819-1901）、説教者ミルザ・ノローラ（1855-1925）、講演者デイヴィッド・バロン（1855-1926）、宣教師レオン・レヴィソン（1881-1936）、神学者アーノルド・フランク（1859-1965）などが挙げられます。［16］

宣教団体の中に、イエスを信じるユダヤ人の割合が比較的高かったことから、既存の教会機構や宣教組織の中で（あるいはその枠を超えて）、独自の「ヘブル人クリスチャン」としてのアイデンティティを確立することの可能性や、その是非に関する議論が生じました。この議論は、イエスに対する信仰と、ユダヤ人であることとは両立しないという考えを強く持っていた、当時の教会とユダヤ人共同体の双方に変化を迫るものとなったのです。ヘブル人クリスチャンのアイデンティティの胎動は、1813 年にロンドンで開かれたブネイ・アブラハム（アブラハムの息子たち）の最初の会合までさかのぼることができます[17]。新しく生まれたヘブル人クリスチャン運動の中の多くの人々は、イエスを信じるユダヤ人としてのアイデンティティを包括的に捉えて、既存の教会と融和的関係を持とうとしましたが、中にはより分離的（あるいは独立的）な方向に向かう人々もいました。

完全なヘブル人クリスチャンのアイデンティティというビジョンを提唱した人々は、民族的にユダヤ人の信徒が、神学的、典礼的、制度的にも一般の教会から独立して、ヘブル人クリスチャンの共同体を作ろうとしました。独立することで、ユダヤ人クリスチャンは自分たちの民族の習慣に忠実であり続け、自分たちの信仰に基づく新しい典礼的・神学的表現を創り出し、他の様々なユダヤ人グループと密接な関係を自由に築くことが可能になると、彼らは主張したのです。これは、新しいユダヤ人伝道活動の重要な手法を生み出す可能性がある動きだと考えられました。この新たなビジョンの中から、宗教的、共同体的生活のさまざまなモデルが生まれ、それが今日のメシアニック・コングリゲーションにつながる原形となったのです。

このビジョンを新たに確立しようとしたユダヤ人信徒たちの大多数は、伝統的なユダヤ教の宗教的家庭の出身でした。彼らは召命の中心として、２つの優先事項を認識していました。第一はユダヤ人への継続的な福音宣教、第二はイエスが復活のメシアであり、神の永遠の御子であるという信仰の宣言でした。もしイエスがユダヤ人のメシアでないなら、彼は諸国民のキリストではない、という深い洞察がその核心にありました。この新しいビジョンに勢いを与えた、複数の要因を列挙すると、ユダヤ人伝道の相対的な「成功」[18]、多くの異邦人クリスチャンたちからの継続的な支援[19]、キリスト教シオニズムの成長、エルサレムにおける近代初のユダヤ人司教区の設立などです。この時期の重要人物は、牧師リドリー・ハイム・ハーシェル（1807-1864）、翻訳者スタニスラウス・ホーガ（1791-1860）、宣教師ジョセフ・ラビノヴィッツ（1837-1899）、牧師カール・シュワルツ（1817-1870）、神学者ポール・フィリップ・レバートフ（1878-1954）など。また、ユダヤ人が伝統から解放され、世界でユダヤ人口が増加した時代であったことも要因の一つでした。

しかし、このビジョンの正当性をめぐって多くの教会で議論が交わされ[20]、反対者たちはこのビジョンの追求が非現実的で、教会の一致を損ない、ユダヤ人伝道の中心点から人々を脱線させると懸念しました。多くの教会グループは、ユダヤ人としてのアイデンティティよりも教会への忠誠を優先させるヘブル人クリスチャンと良い関係を作っていました。しかし、そのような場合、ユダヤ人のアイデンティティは、たいてい子供の世代で「失われる」[21]ことになったのです。さらに、教会内の一部には、律法の民族的な生活あるいは儀式的側面は、すべて福音の到来によって破棄されたという神学的信念を持った人々も存在しました。

ホロコーストとイスラエルの再建国

ホロコーストとイスラエルの再建国という２つの事件は、ユダヤ人のアイデンティティと自己認識の多くの側面に根本的な変化を引き起こしました。それらの事件はまた、クリスチャンの思考方式と伝道実践にも大きな変化をもたらしたのですが、それがユダヤ人伝道の分野にも影響を与えました。ユダヤ人とクリスチャンの出会いは、いつもホロコーストによって、ある程度の影響を受け続けていると、多くの人々が考えています。

ホロコーストの現実を受けて、いくつかの教会のグループや宣教機関は直接的なユダヤ人伝道から対話、相互学習、支援に重点を置いた宣教へと向きを変えていきました。旧約聖書はユダヤ人に適用され、新約聖書は異邦人のためのもので、ユダヤ人の道（律法への忠誠とユダヤ人のアイデンティティの維持を通して）と異邦人の道（イエスのメッセージへの個人的忠誠と新約の賜物を通して）という二つの別々の「救い」の道があると考える二契約神学は神学の再編によって度々支持され、それが極端な形のディスペンセーション神学と結びついた例も見られます。この変化の結果、ユダヤ人伝道の重要性と有効性は教会内で多くの人々にとって必ずしも明らかではなく、まして優先事項ではなくなっていることを覚えておくべきです。

イスラエルの再建国は、ユダヤ人伝道にも大きな影響を与えました。近年、ユダヤ人伝道で最も大きな成長を遂げたのはイスラエルにおける新しい宣教の取り組みであり、その結果としてイエスを信じるユダヤ人の数が増えたと言えます。具体的な数については度々議論が起こりますが、現在イスラエルには自らをメシアニック・ジューと定義する約 3 万人の信徒がおり[22]、ほとんどがイスラエルのメシアニック・ジューの会衆（コングリゲーション）に属しています。時に、会衆が他のユダヤ人団体（反宣教団体）からの敵意と迫害に直面する場合もあります。それらの団体は、会衆の法的権利を損ない、会衆生活の重要な部分を制限しようとするのです。3 万人という数は決して多いとは言えませんが、ほんの数十年前と比べれば大きく増加しています。この成長の結果、ヘブライ語を話す最初のメシアニック・バイブル・カレッジの設立（ネタニヤを拠点とする）など、多くの重要な出来事が起こりました。

Chosen People Ministries の最高責任者であるミッチ・グレイザーは、イスラエルとの関わりについて以下のように述べています。

> イスラエルにおける Chosen People Ministries の成長は、この国の人口構成の変化を反映しています。私たちはまず、特に 1948 年以降にヨーロッパ系ユダヤ人、セファルディ系ユダヤ人に宣教しました。1970 年代から 1980 年代にかけては、若者の間で高まっていたアリヤー運動（ユダヤ人のイスラエルへの移住）のために宣教師を送り、その 10 年間にロシア系ユダヤ人の移民の人々に伝道、会堂建設、子供キャンプなどに重点を置いた活動を行いました。
> 2005 年には、ジャーマン・コロニーの建物を購入してエルサレム・メシアニック・センターを設置しましたが、それが今もイスラエルの活動本部となっています。ベス・サー・シャロームと呼ばれるイスラエルでの Chosen People Ministries で働く人々の中には、様々な国からアリヤーした人やサブラ（イスラエルで生まれたユダヤ人）がいます。
>
> 現在 24 名のスタッフがエルサレムとテルアビブでメシアニック・センターを運営しています。センターでは、聖書研究、指導者養成、福音伝道における関係づくり、特別な宣教イベント、ホロコースト生存者である高齢者の方々を支援するための慈善事業などが行われています。また、エルサレム、テルアビブ、スデロット、アシュドッドに食料配給センターがあります。

私たちは、テルアビブのダウンタウンに隣接する地域で宣教活動の地盤を作っています。ラマット・ガンはテルアビブ中心部では家賃が高すぎて住めない家族が多く住む衛星都市です。近くの同様の都市に住むイスラエル人の総数は 30 万人以上にのぼり、こういった地域は若い子供連れの家族や多くのロシア系ユダヤ人移民たち、そしてイスラエル国内での最初の入植者を含む「古参の人々」が混じって住んでおり、宣教の必要性が非常に高いのです。

2016 年にはラマット・ガンの人通りの多い商業地区に 1,600 平方メートルのオフィスを借り、現在はそこを改装してテルアビブ広域での活動の中心地としています。私たちは、聖書研究会、講座の公開、伝道カフェ、母親のためのグループ、子どもたちのためのミニストリー、そしてさまざまな人道支援活動を行っています。
ローマ人への手紙 11 章 25-29 節の約束が成就するまで、イスラエル国内での働きを継続し、拡大していきたいと考えています。

Jews for Jesus のエグゼクティブディレクターであるデビッド・ブリックナーは、イスラエルでの活動について以下のように述べています。

私が Jews for Jesus の事務局長になったのは 1996 年でした。イスラエルにおいて公式な活動を確立する前でしたが、イスラエルの地元で活動することが重要な優先事項であると確信していました。1996 年の最初のビジョン・ステートメントで、私は次のように述べました。「かつて、ニューヨーク周辺には、世界のどこよりも多くのユダヤ人がいました。現在、イスラエルには 440 万人のユダヤ人が住んでおり、その人口は増え続けています。私たちはこの新しい開拓地に積極的かつ戦略的に進出していかなければならないのです。私たちのイスラエルの責任者トゥビヤ・ザレツキーは、最近のクリスチャニティ・トゥディの記事でイスラエル人が他のイスラエル人に福音を伝えるのが最善だと、雄弁に語っています。私はトゥビヤが正しいと信じています。私たちはイスラエル人を訓練して自分たちの民に福音を届けさせるべきです。私たちはゆっくり、慎重に動いてきましたが、今こそイスラエルでの活動にもっとエネルギーを注ぐべき時なのです」。

この目標を達成するために、私たちは熱心に活動を開始し、テルアビブに最初の事務所を開設しました。2002 年にはイスラエルにおける正式な非営利団体（アムタ）の地位を獲得し、初めて地元生まれのイスラエル人であるダン・セレッドを責任者に任命しました。その後すぐに、イスラエルの旅行者コミュニティへの伝道活動「マッサ」を開始し、伝道活動を行うイスラエル人の訓練を始めました。また、テルアビブの南端にあるフロレンティンに購入した建物でトレーニングセンター（モイシェ・ローゼン・センター）を開設し、イスラエル人をフルタイム伝道者とすることができるように、ヘブライ語による訓練を開始しています。

2008 年にはイスラエルの全 12 地域でサチュレーション伝道（注：地域を福音で満たす伝道方式）を実施する取り組み「Behold Your God Israel」を開始し、2018 年には 70 名以上のスタッフ・ボランティアが参加した 10 本立ての多面的な伝道をエルサレムで行って、それが最高潮に達しました。このイベントは近代イスラエル国家独立 70 周年と重なり、私たちはエルサレムに 2 つ目の Jews for Jesus の支部を開設することができました。現在、エルサレムには 8 人のフルタイム宣教師、テルアビブには 25 人のフルタイム宣教師がおり、管理スタッフも充実していて、インターンシップ・プログラムも活発に行われています。

2020 年のイスラエルのユダヤ人口は 700 万人近くに達すると言われています。そして、私たち Jews

for Jesus の全世界での活動のうち、イスラエルでの活動が最大規模のものとなっています。

イスラエルに焦点を当てることは非常に重要なことですが、他の多くの国々で行われている重要なユダヤ人伝道の物語から目をそらすべきではありません。例えば、世界のユダヤ人人口の大部分を占めるアメリカ[24]、イギリス、南アフリカ、オーストラリア、エチオピア[24]、旧ソビエト連邦時代の主要地域であった、特にウクライナ、モルドバ、カザフスタンなどの地域では重要かつ先駆的なユダヤ人伝道が行われてきました（今でも行われている）。ここ数十年で、これらの地域から多くのロシア語を話すユダヤ人たちがイスラエルに帰還（アリヤー）しているため、旧ソビエト連邦地区での伝道活動はイスラエルでの伝道活動にも影響を及ぼしています。

旧ソビエト連邦崩壊後にロシアで活動を行い、重要な役割を果たしたアビ・シュナイダーは、以下のように述べています。

旧ソビエト連邦の崩壊はその地域に住むユダヤ人に福音を伝える前例のない機会となりました。私たちは、そこで福音に対して驚くほど人々の心が開かれていることを発見したのです。神は確かな恵みによって人々が福音を受け入れる準備をされましたが、人間的に見れば、その背景には次のような要因がありました。まず、政権が崩壊して基盤となっていた信念体系が崩れたので、その空白を埋める必要があったこと。旧ソビエト連邦時代には宗教の禁止によって「禁断の果実」となっていた福音に手が届くようになったこと。そして、福音宣教が禁じられていたことで、西洋世界のユダヤ人が今なお受け継いでいるイエスに対する反感を、ロシアのユダヤ人たちは持っていなかったのです。

神は恵みにより、これらすべてのことを用いられて、イェシュアが私たちの罪のために死に、よみがえられたという知らせを受け取れるように、旧ソビエト連邦崩壊後のユダヤ人たちの心を整えてくださいました。旧ソビエト連邦地域で育ったユダヤ人の心に生まれた信仰は、やがてユダヤ人たちの移住によってアメリカ、ドイツ、イスラエルへと波及しました。彼らは福音を携えて移住して行ったのです。今日でも、ロシア語を話すユダヤ人がいるところでは、旧ソビエト連邦崩壊時に蒔かれた福音の言葉が多くの実を結び続けています。

現代イスラエル国家の再建は、現在進行中のユダヤ人伝道の歴史に間違いなく大きな影響を及ぼしています。紙幅の関係で完全に分析することはできませんが、5 つの重要な点は強調されるべきでしょう。

第一に、イスラエル国家の再建はユダヤ人伝道とユダヤ人国家の再興という 2 つの基礎的な支柱を持ち続けてきたクリスチャンの希望を深めるものです。聖書の言葉の成就として主がイスラエルの民を彼らの地に回復されたのなら、なおさら、主がメシアを通してご自分の民を霊的に回復されることも私たちは信じることが出来るでしょう。

第二に、イスラエル国家の再建は、預言的聖句の読み方を変えます。例えば、イザヤ書 19 章は、預言当時の文脈だけでなく、終末論的文脈も含んでいます。イザヤ書 19 章に明記されたエジプトやアッシリアだけでなく、その他の国々でユダヤ人とイスラム教徒のために働く伝道者たちにも、この預言の言葉は励ましになるでしょう。イザヤ書 19 章で期待される宣教の成果の一つは、多くの「イシュマエルの息子（と娘）」がイエスを信じ、彼らの助けで多くの「イサクの息子（と娘）」がイエスの救いの信仰を発見することであり、また逆に多くの「イサクの息子（と娘）」も「イシュマエルの息子（と娘）」を助けるでしょう。

第三に、イスラエル国家の再建はユダヤ人伝道の焦点を変えます。イスラエルの地に住むユダヤ人の数が

それ以外の地に住むユダヤ人の総数を超えるのは二千年以上も無かったことなのです。以前は主にヨーロッパ（あるいは他の地域）のユダヤ人コミュニティへの伝道に重点を置いていたユダヤ人伝道団体は、イスラエルの地で活動する新たな機会や課題に忠実に対応し、人材や資金を再配置することが求められているのです。この再配置には、もう一つの潜在的な側面があります。それは、福音をイスラエルに「持ち帰る」のではなく、福音がイスラエルから発信される働きを支援することです。福音がイスラエルから「出て行く」ことは多くの点で新約聖書のパターンを再現しており、双方向に宣教が行われることは、重要な霊的・神学的意義を持っています。

第四に、イスラエル国家の再建は派遣される宣教師（およびその支援団体）と、それを受ける共同体の関係を変えます。（これは変わるべきです）。受ける共同体で、地元の人々の独立したメシアニック会衆が機能している場合は特にそうなり得ます。以前、宣教師は自分たちの「母国の教団、機関、支援者」から派遣され、後援を受けたプロジェクトのために派遣されるのが普通でした。しかし現在は、多くの地元のメシアニック団体が機能しており、独自の宣教の取組みを行っています。そこで、宣教師の募集、説明責任、資金調達などの実際的な問題と共に、もっと「霊的」な側面、すなわち宣教活動の価値観と期待する「成果」などについて、避けられない変化が起こっているのです。

第五に、イスラエル国家の再建という現実は、多くのユダヤ人に自分自身のアイデンティティに対する新たな自信を与えています。かつては閉鎖的で疎外されたユダヤ人社会の中で、ユダヤ人たちに忌み嫌われていた福音のメッセージが、民主的な世俗国家の中でイスラエル国民として暮らす人々にとって、探求に値するものとなる可能性があるのです。彼らは今や、陽光あふれるテルアビブの海岸や、福音書によればイエスの教えと伝道の中心地だった、現代の活気あふれるエルサレムに暮らしているのです。このような個人的な姿勢の変化と共に、ユダヤ人の神学・歴史学の分野からも「ユダヤ人によるイエスの再評価」と呼ばれる開放性が見られるようになっています。しかしながら、この「開放性」を強調しすぎたり、福音に対する根強い反感を軽視したりすべきではありません。現代のユダヤ人の多くの環境、特に閉鎖的で信仰熱心な超正統派のコミュニティの中では、福音に対する反感は根強く残っているのです[25]。

ユダヤ人伝道の歴史は変えることができませんが、過去の成功や失敗から学ぶべきことは多くあります。今日、ユダヤ人伝道に携わる人々が反省し、場合によっては赦しを請うべきことが歴史の中には多くありました。誠実な反省の精神は、近年、様々な教会や宣教のネットワークによってユダヤ人伝道のテーマ（そして、ユダヤ人とキリスト教の関係という幅広い問題）に対してなされた数多くの文書や声明に示されています。

以下は、そのような文書の例です。

（参考資料）

第二バチカン公会議（1965 年）の「ノストラ・アエターテ」(Nostra Aetate)。
教会とユダヤ人、世界教会協議会信仰と秩序委員会（1964-68 年）より。
イスラエル、人、土地、国家、オランダ改革派教会シノドス（1970 年）。
教会とユダヤ人、ドイツ・ノイエンデッテルサウで開催されたルーテル世界連盟協議会（1973 年）より。
神の唯一性とキリストの唯一性、ルーテル世界連盟、ノルウェーのオスロでの会合から（1975 年）。
ウィローバンク宣言、キリスト教の福音とユダヤ人について、ユダヤ人伝道に関するローザンヌ協議会（1989 年）より。
ユダヤ人福音主義。2004 年にタイのパタヤで開催されたローザンヌ世界伝道協議会から、教会への呼び

かけ.
ケープタウンの約束、信仰告白と行動への呼びかけ、第3回ローザンヌ協議会（2010年）より。
神のゆるぎない言葉-キリスト教徒とユダヤ人の関係に関する神学的・実践的視点、英国国教会信仰と秩序委員会（2019年）より[26]。

結論（まとめ）

ユダヤ人伝道の歴史は、教会史の中で複雑に、そして時には激動しながら紡がれてきました。この歴史に関連する神学の立場から、ユダヤ人の人口統計、グループのアイデンティティ、伝道戦略、ユダヤ人の信仰における様々な違いなど、研究すべきことが多くあります。すべての伝道は、福音に出会った一人の個人から始まることを思い出すのは良いことです。そのような出会いには、歴史的な洞察、学ぶべき教訓、そして感謝すべき理由があります。この第1章は、ユダヤ人の福音との出会いで締めくくられるのがふさわしいと思います。この結びに登場する伝道者は20世紀のユダヤ人伝道界ではよく知られた人物でした。

エリックは、正統派ユダヤ人の家庭に生まれました。父親はハマースミス（西ロンドン）のシナゴーグの聖職者で、第一次世界大戦中はユダヤ人部隊のチャプレンを務めていました。エリック自身もユダヤ人の大学に入り、1930年代には東ロンドンで居留地を管理していました。その後、シェフィールドで再定住の担当官として働き、第二次世界大戦後にはロンドンに戻ってきました。

その後、私生活が乱れて不幸な時期が続いたエリックは彼自身がそれまで信じていた土台や根拠に疑問を持ちました。そして、真実と救済、その答えを探し始めたのです。40代後半のある日曜日の午後、エリックはハムステッド・ヒースに散歩に出かけて友人のキーツの家を訪ねることにしましたが、家には誰もおらず、ドアは閉まっていました。そこで丘の上にあるセント・ジョーンズ・ダウンシャー・ヒル教会に引き寄せられるように歩いて行きました。その時、たまたまそこにいた教会の牧師が話しかけてきて「あなたも来て、私たちの仲間とお話ししませんか？」とエリックに言いました。「私はふさわしくありません、私はユダヤ人です。」とエリック。するとジェイコブ・ジョクス牧師は「私もユダヤ人です。」と答えました。

こうして友情が生まれ、それはジェイコブ・ジョクス牧師が亡くなるまで続きました。ある日、エリックは「他者が私をどう傷つけたのかは問題ではないのです。私がどこを間違ったのかが問題です。」と言いました。「そうだね」とジェイコブ牧師はうなずき「君はバールテシュバ（悔い改めの達人）にならなければならない。」と答えました。

そうです！ユダヤ人エリックはユダヤ人であるジェイコブ牧師の働きによって、自分の人生をユダヤ人イエスに委ねました。やがてエリックはイギリスで国際ヘブル人クリスチャン同盟の会長となり、他のユダヤ人にたゆまず福音を伝えました。彼はユダヤ人のことがよくわかっていたので、ユダヤ人から信頼されたのです[27]。

私たちはユダヤ人伝道の過去の歴史を研究し、今という現実を生き、聖書の保証に基づいて未来の希望を準備しなければなりません。聖書は全イスラエルの救い（ローマ 11：26）と、諸国民の救いが満ちること（ローマ11：26)、そして、イスラエルの部族から救われた者とあらゆる国民、部族、民族、言語から救われた「大群衆」が永遠に「多様性を持った一致」をすると証ししているからです。(黙示録7)

これらの言葉において、聖書は深い謎と崇高な実体、すなわち、神の救済計画におけるユダヤ人と異邦人、イスラエルと教会の相互依存と相互関係を示しています。その救済という神の目的を、アブラハム、

イサク、ヤコブの神である神の栄光のために証ししようとする営みが、過去のユダヤ人伝道でした。それは今もこれからも変わることはありません。

2022 年 12 月 7 日　第一章翻訳
（日本語訳：田中身和子）

第２章 ユダヤ人社会とユダヤ人伝道

-トゥビヤ・ザレツキー博士
英語本文へのリンク

この章は、現代の多文化でグローバルなユダヤ人社会について知っていただくことを目的としています。ユダヤ人に有意義で適切な形で福音を伝えたい場合、この章に書かれた情報が役立つでしょう。以下は、現在ユダヤ人宣教に携わっているローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会（LCJE）ネットワークのメンバーによって提供された、世界のユダヤ人に関する現実的な状況報告です。

本章では、まず現代のユダヤ人社会の世代的な違い、宗教的な違い、居住地域による違いについて紹介します。その後、現代のユダヤ人の中の変化しつつある４つのサブグループを取り上げ、それがユダヤ人伝道に与える影響について述べます。最後の部分では、５つの地域で活動する LCJE のメンバーからの、各地域におけるユダヤ人伝道の機会について報告を掲載します。

世界のユダヤ人社会の現状

２１世紀が始まって数十年の時が経過した今、ユダヤ人の文化の中には大きな多様性があります。クリスチャンが、全世界のユダヤ人と福音の接点を理解するためには、その多様性を知らなければなりません。私たちが行う全てのコミュニケーションは異文化間で行うことになるので、私たちは現代のユダヤ人社会の中に存在する新しくて複雑な文化を学ぶ用意が必要なのです。

ですから、特定のユダヤ人と有意義な関係を築きたいのであれば、その人の特徴を見極めることが必要です。例えば、あなたと知り合いのユダヤ人は英語圏の出身ですか、それとも多言語でヨーロッパ、アフリカ、アジア諸国の言語（トルコ語、ペルシャ語、アラビア語など）、あるいはイスラエルのヘブライ語でコミュニケーションができますか。他民族と結婚した親から生れて、自分も多民族と結婚しているでしょうか。それともユダヤ人同士で結婚しているでしょうか。異邦人と結婚を前提に交際中でしょうか。ベビーブーマー、ジェネレーション X（1965-1980 年生まれ）、またはミレニアル世代の、どれに最も近いでしょうか。また、そのユダヤ人はどのような霊的傾向を持っているでしょうか。特定の宗派に所属しているでしょうか。

世代別のユダヤ人の違い

現代のユダヤ人を理解する上で、世代、地理、人口、歴史などの背景を知ることが必要です。簡単な例として、1945 年から 1965 年に生まれたホロコースト以後の世代を取り上げてみましょう。この世代はアメリカでは「ベビーブーマー」と呼ばれています。彼らのユダヤ人としてのアイデンティティは宗教的、あるいは人種的なもので、早くから社会的アウトサイダーとして扱われてきました。彼らは 1948 年のユダヤ人の祖国建国と、1967 年の父祖の都エルサレムの軍事的奪還の際には、数に勝るアラブ軍と戦ったイスラエルが国際的に非難されるという状況の中で育ちました。そして、ベビーブーマー世代のユダヤ人たちは、彼らの民族性がユニークでパワフルなものだと考え、誇りを持ったのです。反ユダヤ主義やソ連のユダヤ人の抑圧に反対する彼らの活動は、1960 年代から 1970 年代にかけて起こった黒人の公民権闘争への共感にもつながりました。こうして、ユダヤ性は宗教的、文化的な要因を超えて、より広範囲のものだと考えられたのです。

一方、1965 年から 1980 年に生まれたユダヤ人は「ジェネレーション X」、1981 年から 1996 年に生まれたユダヤ人は「ユダヤ・ミレニアルズ」や「ジェネレーション Y」と表現されます。この世代のディアスポラ・ユダヤ人は、戦後のベビーブーマーとその孫世代であるミレニアルズまでの間に文化的アイデンティティの激しい変化を経験しました。それは、世俗化やユダヤ教からの離反、少子化などの変化です。1990 年に米国で行われたユダヤ人の人口調査によると、米国のユダヤ人の 63%がどのユダヤ教団体にも所属していません。ディアスポラ・ユダヤ人の出生率は、非正統派家庭で一組の夫婦につき 1.8 人程度となっています[28]。1985 年から 1990 年にかけて北米とヨーロッパではユダヤ人の 52%以上が他民族と結婚したという、驚愕の数字もあります[29]。その後に行われた 2013 年の調査でも、多民族との結婚率は上昇し続けています。旧ソ連全体では、1990 年代初頭までにユダヤ人の他民族との結婚率は 70%から 80%と推定されていました[30]。2018 年のイスラエルの統計によれば、ユダヤ人と異邦人の夫婦の非ユダヤ人家族としてアリヤ（帰還移民）した人々が、40 万 200 人に達したとしています[31]。

1981 年から 1996 年にかけて生まれたユダヤ人のミレニアル世代である「ジェネレーション Y」は、1980 年代後半に始まった民族同化と異人種結婚の増加の影響を受けて生まれた世代の人々です。1985 年以降、米国、欧州、特に東欧のユダヤ人の間では非ユダヤ人との結婚が主流となり、ユダヤ系ミレニアル世代は親世代と同じかそれ以上の割合で異邦人と結婚して家庭を作りました。そして、私たちが大学で見かけるユダヤ人大学生は、彼らの子供であり、半数以上がユダヤ人と異邦人の結婚した家庭の出身で、混合したアイデンティティを持っています。米国のシンクタンクであるピュー研究所の調査では、ミレニアル世代の 68%は神の存在を疑ったことがないと言いますが、メシアニック・ラビであるジョエル・リーベルマンは、メシアニック・ジューの家庭で育った Z 世代の子どもたちに、「...もし、あなたが信仰について苦しんだことがないなら、あなたの信仰は“借り物”になるだろう」[32]と助言しています。

ミレニアル世代にとってのホロコーストは、彼らの両親や祖父母のように人生を変えた歴史的事件ではありません。「二度と許さない」という言葉を使っても、米国で 1960 年代から 1970 年代にかけて起こった反ユダヤ主義や民族的不公正に耐え、黒人と共に公民権をめぐって戦ったユダヤ人世代のような強い感情は無いのです。両親や祖父母の世代にとってユダヤ人の生存に関わる重要事件だった 1948 年のユダヤ人祖国の建国と 1967 年の六日間戦争も、ミレニアル世代にとって同じ意味を持ってはいません。彼らの両親や祖父母が当時の歴史的、文化的な圧力によって人格を形成されたのに対し、Y 世代のユダヤ人成人たちは、更に複雑な文化的影響を受け、全く異なるユダヤ人のアイデンティティの要素を持っているからです。スティーブン・コーエンとアリ・ケルマンはこう述べています。

> 米国のユダヤ人の最も古い世代の人々は、ホロコーストやイスラエル建国を記憶しています... しかし、若いユダヤ人、特に今日の若い成人のユダヤ人には同じことは言えません。ユダヤ人のアイデンティティの位置づけは、公的なものから私的なものへと移り変わっています... 多くの米国のユダヤ人は、誇り高いディアスポラのユダヤ人として、平等のアイデンティティを主張しています... [33]。

ユダヤ系ミレニアル世代とその子どもたちのアイデンティティ形成は、伝統的な制度による社会的権威よりも外部とのつながりや個人の選択によって決定されるようになりました。この世代は自分のユダヤ人としてのアイデンティティについて多くの選択肢を持ち、テクノロジー、メディア文化、グローバリゼーションなどの影響を受けています。ホロコースト直後の米国におけるユダヤ人は、おそらく 80%以上がアシュケナジあるいは東欧出身者でした[34]。東欧のユダヤ文化、いわゆる「イディッシュケイト」がユダヤ文化と見られていました。しかし、今日のユダヤ系であるミレニアル世代やその子供たちは、ジェンダー、性的指向、民族性などは外から規定されるものではなく、自分で選ぶものであるというポストモダンの考え方が浸透しているのです。

2013 年のピュー研究所の調査報告「A Portrait of Jewish Americans」によると、現在結婚している米国のユダヤ人のうち、実に 44%が非ユダヤ人の配偶者と結婚していることが分かりました。ユダヤ人が異邦人と結婚する率は 58%ですが、ある社会学者は「米国のユダヤ人から正統派の宗教的ユダヤ人の小さなコミュニティを取り除いてサンプルを抽出すれば、異邦人との結婚率は 73%にも達するだろう」と述べています[35]。

ユダヤ人の他民族との混血は特にミレニアル世代とその子供たち、つまりジェネレーション Z にとっては日常的なことですが、ユダヤ人社会で異邦人との結婚は 20 年前まではタブー視されていました。しかし、ユダヤ民族は聖書と聖書以後の歴史を通して他民族との結婚を乗り越えて生き延びて来ました。イスラエル国内でもディアスポラのユダヤ人の間でも、ユダヤ人と異邦人の結婚と混血について、様々な研究が行われています[36]。

グローバル化、混血、異邦人との結婚は、世界中のユダヤ人に影響を与え、ユダヤ人のアイデンティティをも変化させています。クリスチャンが様々な国のユダヤ人と出会うと、ユダヤ人というアイデンティティの意味を見出すのに苦労するでしょう。ユダヤ文化の特性に関する古い思い込みを捨て、偏見を持たないで会話をすることが必要かもしれません。そうすれば、ベビーブーマー、ジェネレーション X、ミレニアル世代、そして 1995 年から 2010 年の間に生まれた子どもたちの間で、今日のユダヤ人が考えるユダヤ性がまったく異なることに気付くでしょう。例えば、ある本は「シナゴーグではなく、ユダヤ人の郷愁の想いを通じて宗教的な意味を発見し体験するのが今の風潮なのか？」と問いかけています[37]。

反ユダヤ主義は、かつてのアメリカでユダヤ人移民に対する偏見や社会的不公正として記憶されていましたが、今ではピッツバーグ、ノースリッジ、サンディエゴのシナゴーグでユダヤ人に対するテロがあり、パリのユダヤ人が普通に街を歩いてコーシャ市場で買い物をするだけでも同様の襲撃事件が起こっています[38]。大学キャンパスでは、イスラエルを非難するという形の反ユダヤ的な行動がますます見られるようになっており、そこには明らかに世界のユダヤ人を標的にした主張が見られます。それは、イスラエル国家に反対すると称するＢＤＳ運動（ボイコット、投資中止、制裁）のデモを見れば明らかです[39]。中東和平を推進すると称する団体は、実はユダヤ人国家の抹殺を目指して活動する反ユダヤ主義団体だとして、ジャスティン・クロン氏はクリスチャンたち、特に学生たちに警告を与える活動を行っています[40]。

宗教的立場による違い

米国とイスラエルに住むユダヤ人が、世界のユダヤ人口の 84%を占めますが、その 72%から 75%が世俗派であると考えられています。2013 年にピュー研究所が行った米国のユダヤ人に対する調査によれば、自分は「宗教的」だと回答した人の所属教派は、35%が改革派、18%が保守派、1%が再建派、10%が正統派でした。また 30%は、これらのどの教派にも属していないと回答しました。宗教的だと回答したのに、どの教派にも所属していない人が 30%もいたのです。一方、ヨーロッパにおいては、ユダヤ教の最大教派は正統派で、それに続くのが米国の改革派に相当する自由派または進歩派です[41]。

イスラエルでは 1971 年にはアメリカの改革派が「進歩的ユダヤ教イスラエル運動」として一定の地位を得ましたが、結婚式に関して政府の認可を受けているのは正統派だけです。（訳注：イスラエルでは正統派が政権と結びついて権力を独占しており、改革派や保守派は権威を認められていない。）

ディアスポラのユダヤ人は「世俗派」と「宗教派」に二分できますが、イスラエルではこの二つのカテゴリーの間に大きな人口層が存在します。それは「伝統派」あるいはマソルティと呼ばれる人々で、厳格な

正統派の律法順守と世俗的なライフスタイルの中間に位置します。マソルティのユダヤ人たちは自分たちの生活が、現代的な生活に適応しながら、宗教的な規定を順守できる最善の方法だと考えています。例えば、安息日の労働は拒否しても、安息日にタバコに火をつける（火を起こす）ことには問題がないと考えるわけです。

前述のピュー研究所の調査によれば、米国のユダヤ人で「宗教的」だと回答した人のうち、30%は伝統的なユダヤ教の信者ではありませんでした。そのカテゴリーに入る可能性があるのは、イェシュアを信じるユダヤ人、メシアニック・ジューです。ディアスポラやイスラエルに存在するメシアニック・ジューのコミュニティは拡大して活気に満ちていますが、彼らに関する公式な人口統計データは存在しません。米国では 10 万人程度と推定され、約 300 から 350 のメシアニック・コングリゲーションがあります。イスラエルでは建国以来からのメシアニック・ジューの割合は人口の０.１パーセント以下と推定されています。1998 年、イスラエルにあるメシアニック・コングリゲーションと小規模な「家の教会」を調査した結果、約 5000 人のメシアニック・ジューがいました[42]。現在、イスラエルにおけるコングリゲーションの数は 300 程度で「現在、3 万人以上の信徒がいる」と見られています[43]。（訳注；カスパリセンターが 2019 年に発表した調査は 25000 人としている。）

イエスを愛するユダヤ人がディアスポラの全域におり、イスラエルで顕著であることについては、後ほど詳しく説明します。

地域別に見たユダヤ人

2018 年初めの世界のユダヤ人口は 1460 万 6 千人と推定されています。これは、イスラエル国内と世界のその他の地域に住む（ディアスポラ）ユダヤ人の両方を含む数字です。1945 年のホロコースト直後、世界の主要なユダヤ人口は 1100 万人と推定されていました[44]。それ以来、イスラエル国内とディアスポラという 2 つのグループの人口は、以下のように大きく異なる変化を見せていますが、ユダヤ人の総人口は増加基調です。

イスラエル建国直前の 1945 年、そこに住むユダヤ人の人口は 50 万人を超えた程度でしたが、2018 年のイスラエル国内のユダヤ人の数は 650 万人です。一方、1945 年のディアスポラ（離散）ユダヤ人は 1050 万人でしたが 2018 年には 810 万人まで減少しました[45]。イスラエルにおける急速な人口増加は、ディアスポラからイスラエルへの帰還移民またはアリヤの結果です。世界のユダヤ人人口は両者の合計で 1460 万人です。

この 1460 万人という数は、第二次世界大戦後から見れば大きな増加ではあるものの、大戦前夜の世界のユダヤ人口、1650 万人までは回復していません。人口統計学者は、大戦前夜の水準まで回復するには、さらに数十年かかるだろうと考えています[46]。

2018 年現在、イスラエルと米国で 2 カ国は全ユダヤ人口の 84%を占めています。そのほかに、1 万 8000 人以上のユダヤ人口を抱える国は 17 カ国あり、それらの合計が世界のユダヤ人の 14.7%を占めています。イスラエルのユダヤ人口は 655 万 8000 人で、世界のユダヤ人の 44.9%です。一方、アメリカのユダヤ人口は 570 万人で、世界のユダヤ人の 39%を占めています。これは、2013 年にピュー研究所が発表した「アメリカのユダヤ人に関する調査」とほぼ同じ数字です。米国のユダヤ人口が増えないのは、イスラエルへの帰還移民（アリヤ）だけではなく、ディアスポラ・ユダヤ人の少子化・同化を反映しており、1990 年の全米ユダヤ人口調査で早くもその傾向が報告されていました。

一方、欧州のユダヤ人口は過去千年間で最低の水準に落ち込んでいます。イギリス、トルコ、ロシアを含むヨーロッパのユダヤ人は、わずか 130 万人です。これは、1170 年にユダヤ人の旅行家で学者のトゥデラのベンジャミンが推定した数字と同じです[47]。

現代ユダヤ人の４つの特別な集団とユダヤ人伝道

１．スピリチュアルだが宗教的ではない人々（SBNR）

米国ユダヤ人のミレニアル世代とその両親はユダヤ教の伝統や組織よりも個人的な経験を重視するようになっています。それは、1990 年の全米ユダヤ人口調査で、宗教離れが増加傾向にあると報告されていることからも明らかです。ユダヤ人の成人たちの間で「私たちはスピリチュアルだが宗教的ではない」（SBNR）という言い回しが増加していることを耳にします[48]。それでも、ピュー研究所の調査によれば、アメリカのユダヤ人ミレニアル世代の 90%は「ユダヤ人であることを誇りに思っている」のです[49]。

これらの調査結果を総合すると、米国の多くのユダヤ人たちは、伝統的にユダヤ人の特徴であった「神との契約の義務」に参加したいと考えているようです。スピリチュアルな神との関係を求める傾向は、SBNR のユダヤ人たちへの的確な宣教を可能にします。Jews for Jesus の機関誌編集者であり宣教師であるルース・ローゼンは、『神は、神に対する義務を理解したい人々を探している。驚くべきことに、神はご自分を信頼する人々に対して義務を負っておられる』[50]と述べています。

神は土のちりから人を造り、アダムと全人類に「命の息」を吹き込まれた創造主であり、すべての生き物を造られました（創世記 2：7）。また、神は救い主であるイエスを通して、彼を知ろうとするすべての人に永遠の命を与え（ヨハネ 17：3）、イエスを信じる者は神の聖霊の賜物を受ける（ヨハネ 7：37-39）のです。福音が宗教としてではなく、希望と聖書的なスピリチュアル（霊的）なメッセージとして示される時に、ユダヤ人の抵抗感は少なくなるのです。

２．伝統的な権威構造よりも個人の経験

ユダヤ人伝道で考慮しなければならないのは、ユダヤ人の文化的経験である罪悪感、恥、恐れ、ユダヤ人同士の強い関係、生存本能です。世界のユダヤ人は、これらの要素を様々な形で持っていますが、イスラエルのような共同体志向の強いユダヤ人社会と北米のディアスポラのような個人主義が強いユダヤ人社会では、それらが異なった形で現れるのです。

現代のユダヤ人はたいてい、実際のクリスチャンの信仰を理解しないままに、「キリスト教」による歴史的なユダヤ人迫害や民族主義的な反ユダヤ的攻撃という情報をもとに誤った認識を持っています。ユダヤ人の文化においては、クリスチャンという言葉と異邦人という言葉が混同されます。しかし、福音主義のクリスチャンと個人的に知り合うことで、昔ながらの恐怖の固定観念を取除き、メシア・イエスとの関係の中で生きる信仰の美徳を示せる可能性があります。

クリスチャンがユダヤ人に福音を伝えるための取り組みは、個人的な人間関係を築くことから始めるのが最善です。宣教のコミュニケーションは異文化交流であることを認識し、文化間の「橋を渡る」取組みが必要でしょう。ユダヤ人が「キリスト教の世界観」をどう考えているかを、よく知るべきです。福音の宣教とユダヤ人の求道の障害となっている恐れ、罪悪感、恥という諸問題は、率直で心を開いた会話により克服することができます。このギャップを埋めるために、ユダヤ的な異文化コミュニケーションに関する実践的な論文である、ゲイラン・ピーターソンの著書「Shifting Cultural Trends and the Impact on

Communicating the Gospel」[51]は、一読の価値があります。

３．ミレニアル世代：ユダヤ人としてのアイデンティティの変化

最近の調査で、アメリカのユダヤ系ミレニアル世代（1981～1996 年生まれ）のアイデンティティが、前の世代と大きく変化していることが明らかになりました。米キリスト教調査機関のバーナ・グループは、2017 年にアメリカのユダヤ系ミレニアル世代を対象に調査を実施しました。ピュー研究所の世代間調査からわずか 4 年後に行われたこの調査結果は、現在の若いユダヤ人成人たちのユダヤ人アイデンティティが顕著に変化している状況を明らかにしました。

その中で、伝統的なものからの乖離が大きい、驚きの調査結果がいくつかありました。米国のユダヤ系ミレニアル世代は、3 分の 1 以上の 38%が「無宗教」であると答えたにもかかわらず、82%が「スピリチュアリティ」に「多少」または「非常に」興味があり、意外なことに 73%がキリスト教などユダヤ教以外の宗教のスピリチュアリティを学ぶことに関心を示していたのです。

スタンフォード大学のユダヤ教研究教授であるアリ・ケルマンのような米国のユダヤ教指導者たちは、バーナ・グループのミレニアル世代の調査報告について、「私が知っているユダヤ人とは違う...たぶん彼らは私たちがこれまで見たことのないユダヤ人だ」と発言し[52]、米国のユダヤ人ミレニアル世代の劇的な変化に驚きを隠しませんでした。イスラエルの主要紙であるエルサレム・ポストも、米国のミレニアル世代のユダヤ人の 5 分の 1 が、イエスについて伝統からかけ離れた見解を持っているという、バーナ・グループの調査結果を驚きと衝撃を持って伝えました。そして「ユダヤ人のミレニアル世代の 21%が、イエスは『1 世紀に人々の間に住んでいた人間の形をした神』だと信じている」とするオンラインの調査報告を紹介しました[53]。

ウェブ雑誌『ニューボイス』の編集者であるサラ・ワイズマンは疑問を呈しながらも、この常識に反する調査結果が事実であることを認めました。彼女は、ミレニアル世代のユダヤ人を知っており、その人物は「仏教徒とデートして、シナゴグに行かないのに毎日テフィリンを付け、金曜日の夜にクラブで遊ぶのに、携帯電話とコンピューターの電源を切ることにこだわる」[54]と言ったのです。

イエスについて学ぶことに対するユダヤ人の抵抗感は、ユダヤ人の異文化間結婚率の上昇とユダヤ人としてのアイデンティティの形成要因の変化によって徐々に薄れています。米国のユダヤ人の半数近くは自分たちがユダヤ人であることを「非常に重要である」と答えており、バーナ・グループの調査ではユダヤ人ミレニアム世代の 80%が「宗教的ユダヤ人」を自認しています。ワイズマンは「つまり、ミレニアル世代が伝統的なユダヤ教の制度や運動から離れた結果、…… 私たちのユダヤ教が彼らには違って見えるのです」と語っています[55]。

アメリカのユダヤ系ミレニアル世代は、伝統的な宗教への関心は低いものの、スピリチュアル（霊的）な事柄に関心は高いという事実があるため、彼らの個人的で霊的な好みについては、時間をかけて聞き出す必要があります。若いユダヤ人はどのような霊的要素を見出したいのでしょうか？彼らは聖書的な霊性に抵抗はないのでしょうか？彼らは神に何を望んでいるのでしょうか？主の願いに応えて、彼らはどのような霊的な義務を守る用意があるのでしょうか？イエスはそれについて、旧約聖書を用いて次のように語っています。

> 『先生、律法の中の大いなる戒めはどれですか』。すると彼は言った、『あなたは心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛さなければならない。これが偉大な第一の戒めであ

る。そして、第二の戒めもこれに似ている。あなたは自分のようにあなたの隣人を愛さなければならない。 この二つの戒めの上に、すべての律法と預言者が成り立っているのである。(マタイ 22:36-40)

過越の祭りや秋の一連の例祭のような聖書に基づいた行事に、彼らはどのような意味を見出すのでしょうか？そして、ユダヤ人の一員としての彼らの運命に、聖書の観点をどのように関わらせるのでしょうか？互いに聞く関係から始まる異文化理解は、彼らにとって新しい真理である福音を適切に伝えるための最初のステップとなります[56]。

４．他民族との結婚がユダヤ人伝道に与える影響

ディアスポラのユダヤ人の中で異邦人との結婚が増えていることは、すでに述べたとおりです。社会調査によると、異なる民族や宗教を持った人々との結婚は、幻滅や不満の割合が非常に高く、75%とも言われています[57]。家族や結婚生活の安定が脅かされるだけでなく、イスラエルにおいては、ユダヤ民族の存続が危うくなると懸念する人もいます[57]。

離散ユダヤ人の研究は、地理的、社会的、文化的環境の変化の中にある人々に焦点をあてるものです。異邦人との結婚は、その指標となるものですが、文化の変化に対する開放性や脆弱性を生み出すという点が軽視されがちです。ユダヤ人は、非ユダヤ人とのデート、交際、結婚という社会的統合を通じて、新しい文化や精神性に触れることになります。ユダヤ人と異邦人のカップルが抱える課題について独自の社会調査を行った結果、彼らの関係を最も脅かす要因の一つが、互いに受け入れ可能な霊的調和を見出すことが難しいという点にあることが判明しました。繊細にお互いを尊重するアプローチを取れば、異邦人とユダヤ人のカップルは、異文化交流を通じた宣教に適合することを、私たちは発見しました。

世界各地におけるユダヤ人伝道

以上は主にアメリカのユダヤ人コミュニティの状況でした。世界のユダヤ人に関する調査の最後に、イスラエルと、そしてアメリカに次いで大きな離散地（ディアスポラ）のコミュニティ 4 個所の状況について概観しましょう。この 20 年間で、これらの地域のユダヤ人伝道にどのような変化があったのでしょうか？

イスラエル

2000 年紀初頭、イスラエルのユダヤ人たちは平和への展望について懸念し、政治的な平和に注目していました。しかし、過去 15 年間、ミレニアル世代のイスラエル人たちは、技術的、生物医学的な科学の進歩による好景気と、「安全保障の柵の中」での比較的平和な暮らしと、繁栄を享受してきました。そして彼らは、非常に活動的です。

ユダヤ人伝道活動はドイツやイギリスなどの国外に住むイスラエル人や、兵役終了後に東南アジア、ラテンアメリカ、インド、ヨーロッパを旅行するイスラエル人に接触する方向に力点が移っています。イスラエルから離れた地での宣教は、しばしば異文化交流となるため現地のクリスチャンたちと、イスラエルから派遣されたユダヤ人伝道者が協力して行うことになります。この 7 年間、イスラエルのメシアニック・ジュー、特に兵役終了後の若い大人たちが、同胞たちへの働きかけをリードしてきました。

イスラエル国内では、前述のようにメシアニック・コングリゲーションの活動の一環として宣教が行われています。その多くは複数のコングリゲーションの共同事業であり、ヘブライ語、ロシア語、アムハラ語、

アラビア語、スペイン語、英語など、複数の言語が使われます。またイスラエル固有のメシアニック音楽と礼拝形式が新世代に受け継がれており、若いイスラエル人にうまくアピールすることに成功しています。

イスラエル兵士への宣教も日常的になっています。複数のコングリゲーションの協力により、イスラエルのいくつかの主要都市で宣教活動が行われるようになりました。週末に休暇をとる兵士たちは、食事、住居、洗濯、霊的なケアなどを定期的に受けています。イスラエル国防軍に所属する若いメシアニック・ジューは、所属する軍隊の友人を連れて、霊的内容を含む週末のリトリートに参加できます。それが可能になったのは、イスラエル軍が隊員の多様性に対して、よりオープンで受容的な態度をとるようになったからです。また、ホームレス問題や中絶問題、イスラエルの LGBTQ+の人々のニーズに応えるために、メシアニック独自の伝道活動も行われています。これは、今日イスラエルで起きている事柄の氷山の一角に過ぎません。

フランス

Jews for Jesus のパリ支部長、ジョシュア・ターニル氏の報告です。

フランスは長い間、ヨーロッパ最大のユダヤ人居住地として知られてきました。しかし、ここ 20 年間は数が激減しています。1980 年代以前、フランスのユダヤ人の数はおよそ 80 万人でしたが、現在ではその半数程度に減少しています。反ユダヤ主義、特にイスラム系移民の影響でイスラエルや、他のディアスポラ（離散地）へのユダヤ人の流出が進んでいます。

ユダヤ人への反ユダヤ的な落書きや暴力行為の増加は、フランスのキリスト教界に反ユダヤ主義に立ち向かうことを促しました。2004 年にフランスのキリスト教徒に呼びかけが行われたものの、2019 年にフランス福音派全国協議会（CNEF）が反ユダヤ主義に関する会議を開催するまで、対応は行われませんでした[58]。その会議には、ユダヤ人コミュニティの指導者が招待され、キリスト教指導者と会談しました。約 150 人以上が参加しましたが、その 60%がキリスト教福音派の人々、40%がユダヤ人の人々でした。彼らは話し合いと連帯のために会い、フランスの福音派とユダヤ人コミュニティの指導者たちの間で、宗教間の接触を続けることになりました。そこでは相互の異文化理解を深めるために、聖書と福音にまつわるオープンで正直かつ友好的な話し合いが行われました。メシアニック・ジューのメンバーを含む CNEF は、ユダヤ人コミュニティに影響を与えるユダヤ教のイベントやデモに定期的に参加し続けています。2020 年、Jews for Jesus のスタッフは、パリで行われた秋の例祭のシナゴーグ主催の礼拝に招待を受けて参加しました。

イギリス

International Mission to the Jewish People（旧 CWI、世界的な宣教団体）宣教部長のリチャード・ギブソン氏による英国に住む 29 万人のユダヤ人についての報告です。

他のユダヤ人共同体と同様に、イギリスのユダヤ人口の中で最も急速に増加しているのが正統派の中でも厳格な超正統派（ハレディーム）です。2015 年、ロンドンのユダヤ人政策研究所は、イギリスの正統派コミュニティは年間約 5%ずつ増加しているのに対し、その他のユダヤ人が年間 0.3%ずつ減少していると指摘しました。この状況が続くと、イギリスの正統派人口は 18 年で倍に増加します。そこで、イギリスではイディッシュ語が話せるなど、正統派の人々に対応できる宣教スタッフを育成することが急務となっています。

また、イギリスに移住し、定住しているイスラエル人の人口も増えており、彼らへの宣教にも関心が高まっています。彼らは世俗的な傾向があり、東洋的なスピリチュアリティを好むか、全くの無宗教です。イスラエル人のメシアニック・ジューのコミュニティの中で、この分野の宣教に参加するためにイギリスに移住する人が増えています。

旧ソビエト連邦の地域、ロシアとウクライナ

過去 30 年間の世界のユダヤ人口の移動の中で、旧ソビエト連邦地域からの人口流出は最大規模のものだと思われまです。1990 年から 2015 年の間に、特にロシア、ウクライナ、その他の旧ソビエト連邦の地域では、200 万人以上いたユダヤ人人口が 28 万 5000 人にまで減少しました[59]。彼らの移動先はイスラエルと米国で、現在はそれがヨーロッパにも及んでいます。

ロシアのユダヤ人共同体は、環境の激変の結果、メシア・イエスの新しい霊的真理である福音を最も伝えやすいユダヤ人集団の一つとなりました。1990 年代から旧ソビエト連邦地域には、ロシア語を話すメシアニック・ジューのコングリゲーションが数多く誕生しました。これらのコングリゲーションの多くは、世界の他の地域に人口が流出し続けているにもかかわらず、今日もなお地域の人々の霊的活動の場となり続けています。そして、彼らが移り住んだイスラエル、アメリカ、そして最近ではドイツでも、ロシア語で礼拝するメシアニック・コングリゲーションが次々に設立されています。

ロシア語圏とウクライナ語圏のユダヤ人コミュニティに影響を与えている第二の大きな要因は、異邦人との結婚の割合が高いことです。人口統計学者によると、2015 年にロシアとウクライナでユダヤ人が異邦人と結婚する率は 80%、旧ソビエト連邦の他の地域では 65%から 75%でした[60]。このような状況があるため、イスラエルや他の地域に暮らすロシア系ユダヤ人コミュニティに対する宣教では、異文化間宣教が有効な手法なのです。

ドイツ

Jews for Jesus のドイツ支部長、アロン・レウィン氏がベルリンからレポートします。

ドイツのユダヤ人社会は、この 15 年間で劇的に変化しました。ホロコーストで多くの人々が逃げたり殺されたりして以来、1990 年代までドイツのユダヤ人口は微々たるものでした。しかし、旧ソビエト連邦が門戸を開くと、特にウクライナを中心にロシア語を話すユダヤ人が大量にドイツにやって来ました。この共同体の多くはライン・ルール地方に定住したので、ドイツ社会への適応が遅れていましたが、現在ではこのロシア語を話すユダヤ人はドイツ人と結婚する傾向が続き、約 75%の割合でドイツ人と結婚しています[61]。

2010 年になると、さらに第三のグループが加わりました。それはイスラエルからドイツに移民して来た人々です。リベラルで世俗的、時には LGBTQ+といった多くのイスラエル系ユダヤ人たちが、より開かれた社会での受け入れを求めてベルリンに定住し、繁栄しました。現在、ドイツのユダヤ人口 11 万 7000 人のうち、ベルリンに住むイスラエル人は 2 万人になると推定されています。また、この世俗的なイスラエル系ユダヤ人たちは、ロシア語を話すユダヤ人社会との社会的つながりや、より伝統的な文化には特に興味を示さないことが分かっています。

ドイツでは、反ユダヤ主義を禁止する厳しい法律があるにもかかわらず、反ユダヤ的事件は増加していま

す。反ユダヤ的事件の集計が 20 年前に始まって以来、2019 年には反ユダヤ的事件の数が、過去最高を記録しました。報告された事件の数は 2,032 件ですが、それ以外にも報告されていない事案があることに注意しなければなりません。その結果、イスラエル人は街頭でヘブライ語を話すことを警戒するようになりました。そして、ドイツは中東イスラム諸国からの難民を受け入れているため、ドイツのユダヤ人たちは自分たちが攻撃を受けやすい立場にあると感じています。

レウィン氏はイスラエルのユダヤ人とドイツでロシア語を話すユダヤ人への働きかけには、それぞれ異なる文化的な配慮が必要であると報告しています。イギリスでは正統派ユダヤ人の人口が増えていますが、おそらくドイツやフランスの世俗的な風土では同じような現象は起こらないでしょう。異邦人と結婚した人々に合わせた宣教活動は有効だと思われますが、ドイツではまだ初期段階です。

結び

以上のことは、ユダヤ人伝道にどう役立つのでしょうか？

この章を読んだクリスチャンの皆様は、現代のユダヤ人と関わる時に、ユダヤ人の持つ異文化的な視点をより深く理解することから始めるのが最善だと理解されたと思います。すべてのコミュニケーションが異文化の中で行われるため、ユダヤ人の世代、宗教的コミュニティ、地理的環境などの複雑な違いに気づく必要があるのです。メシアニック伝道団体やコングリゲーションは、福音を語る人々とユダヤ人の間の異文化理解の橋渡しを助けています。また、メシアニック・ジューは、ディアスポラのユダヤ人集団や外国旅行中のイスラエル人と文化的に密接なつながりを持っているのです。

私たちは、グローバル化、混血、異邦人との結婚が、ディアスポラやイスラエルのユダヤ人にどのような影響を及ぼしているかを見てきました。また、これらの人々が物の見方を変え、アイデンティティと再び向き合う時期にあることを示しました。そのため、彼らはイエスの福音やそれに対する悔い改めと信仰のような新しい考えに対して、よりオープンになりやすいのです。

また、霊的に心が開かれた離散地の共同体、ユダヤ人と異邦人のカップル、超正統派ユダヤ人、イスラエル人旅行者、アメリカのユダヤ人の若者や大学生、ロシア語を話すユダヤ人移民などに対する最近の伝道活動を紹介してきました。さらに、伝統的なユダヤ教組織に愛着を持たない若いユダヤ人たちの中に「スピリチュアルだが宗教的でない」人々がいることも心に留めておくべきでしょう。

本章は、今日の多文化でグローバルなユダヤ人社会について知るための民族誌的な「スクリーンショット」です。この情報は、ユダヤ人の間で、思慮深く、適切で、異文化に配慮した福音を伝える機会をより多く見出すために役立つでしょう。

2023 年 2 月 22 日
（田中身和子翻訳）

第３章：神学的考察とユダヤ人伝道

–編集責任：ダレル・ボック博士、協力者：エリヤ・コーエン、グレッグ・ハッグ、ライアン・カープ、シャーロット・マチャド、ジェニファー・マイルズ、ロバート・ウォルター

英語本文へのリンク

第一、第二章ではユダヤ人伝道の歴史を概観し、ユダヤ人コミュニティの現在の構成を検討しました。次に検討すべきことは、私たちの持つ聖書的および神学的な枠組みが、ユダヤ人コミュニティ内の人々に福音を伝えることにどのように役立つかを検討することです。神が世界との和解という主題を、選民に与えた霊的な歴史と契約・約束と、どのように結びつけておられるかを、私たちは正確に理解する必要があります。ユダヤ人たちは、世界を祝福する神の約束の中で、なおも特別な役割を持っています。私たちがユダヤ人に証言する場合に、それを強調することで、啓発的な洞察と視点が与えられるのです。

ケープタウン決意表明は、世界の人々と文化を愛することについて述べた章で、以下のように述べています。

> 「この愛はまた、至るところですべての民族と文化に、何とか福音を告げ知らせるよう、私たちに迫る。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、いかなる民族も大宣教命令の範囲からはずれてはいない。伝道とは、まだ神を知らない人々に対する神の愛に満たされた人々の心から流れ出るものである。私たちは恥を抱きつつ告白する。イエス・キリストのうちにある神の愛のメッセージをまだ一度も聞いたことのない民族が、世界には依然として多数存在する。福音をたずさえてすべての民族に到達するために、あらゆる可能な手段を用いるという、ローザンヌ運動を当初から動機づけてきた決意を私たちは再び新たにする。」（ケープタウン決意表明 7. 私たちは神の世界を愛する／日本ローザンヌ委員会公式訳）

伝道についての聖書的な召命は、全ての人が神と再びつながるようにという、神からの呼びかけに対する応答ですが、その対象からイスラエルとユダヤ人が除外されることはありません。旧約聖書の物語におけるイスラエルの中心的な位置、およびイスラエルに交わされた神聖な契約の中で約束されたメシアとしてイエスが来られたことを考えれば、イスラエルが今なお神の召命および計画の一部であることを支持する神学的観点からイスラエルを見る必然性は明らかです。

そこで本章は５つの節に分かれています。1)重要な用語、2)イスラエルが神にとって重要な理由、3)現在の議論、4)神の和解のご計画とイスラエル、5)イスラエル国家の土地と将来に関する疑問、です。イスラエル国家に関する議論は伝道に無関係だと思われるかもしれません。しかし、神が民族集団をどのように見ておられるかは、救いと回復の働きの重要な部分です。神の全体的なご計画におけるイスラエルの位置を見れば、ユダヤ人伝道が教会にとって重要な召しである理由が見えて来るのです。

１節）重要な用語

ユダヤ人伝道

ユダヤ人伝道は、一連の重要な聖書の勧め（命令）に根ざしています。マタイ 28:16-20 の大宣教命令は、弟子を作るために全世界に出て行き、メシアが人々に与えたすべての戒めに従うように人々に教えよと

命じるものです。さらに、ルカ 24 章 44〜47 節にある大宣教命令は、福音を証言するプログラムが、イスラエル、特にエルサレムから始まるとしており、それは使徒 1 章 8 節の記述でも確認できます。この文には、ユダヤ人がアブラハムに与えられた約束に関係があるゆえに、福音の宣教対象から除外されることは全く想定されていません。実際、マタイ 3:9 や、それに対応するルカ 3:8 は、そのような見方を否定しています。これらすべての記述は、ローマ人への手紙 1:16 の「福音はまずユダヤ人に、次にギリシャ人にも」という順序を支持しています。ユダヤ人伝道は、すべての伝道の出発点なのです。救いは、堕落した被造物全体の回復と見なされますが、その中には、神の働きと恵みの模範となるはずだった人々（ユダヤ人）も含まれるのです（使徒 1:6; 3:19-22)。神の主要な契約、すなわちアブラハム契約(創世記 12:1-3)、ダビデ契約(サム下 7:8-17)、および新しい契約(エレ 31:31-37)は、すべてイスラエルとの間で結ばれたものであり、祝福が世に出た後で、イスラエル民族が除外されるなどという計画はありませんでした。神はご自分の約束、特に最初の核となる約束を交わした人々に忠実(ローマ 9-11)なのです。

イスラエル

聖書でイスラエルについて考えるとき、私たちはイスラエルを民として、国家として考えます。一方で、それはしばしば異邦人と対比されるグループであり、イスラエルは民族集団です。これは遺伝や人種だけの問題ではありません。彼らは、近隣にいた多神教の世界とは対照的に、一神教の信仰を長年にわたり持ち続けたのでした。彼らの独特の習慣、慣習、および明確な暦は、イスラエルの「神の民」としてのアイデンティティの形成を助けました。これらの要素は、今日の多くのユダヤ人が持っている、ユダヤ人のアイデンティティの重要な部分を形成しています。ユダヤ人伝道をする際には、それらの要素を積極的に評価することが重要です。
イスラエルという言葉は、土地と場所を持つ国家をも指します。聖書の最初の部分は彼らの物語です。創世記では、アブラハム契約で民と土地の約束が与えられ、出エジプト記から申命記は、民族の形成と約束の地への旅です。そしてヨシュア記は、神が備えてくださった「乳と蜜の流れる」地に入る様子を描きます。そして、イスラエルはエジプト、アッシリア、バビロンなどの他の国々と対抗することになります。そしてバビロン捕囚とディアスポラにおける民族の苦難は、故郷に帰って住みたいという彼らの切望を生み出しました。

民族または国家としてのユダヤ人

ユダヤ人の歴史は、神と関わる中で、他民族に苦しめられる歴史でした。その一方的な関係の歴史は、聖書に詳しく記録されています。唯一の神に焦点を当てる彼らの関心は、エジプトに始まり、アッシリア、バビロン、ローマに及ぶ、他の国々からの攻撃をもたらしました。近年も、ヨーロッパのユダヤ人たちは挑戦と攻撃を経験しており、教会もその加害者の一部となっています。このような圧力により、多くのユダヤ人は再び故郷に帰ることを切望するようになりました。また、ホロコーストという恐怖の事件は、イスラエルの民族自決権への幅広い共感と支持を生み出しました。非常に多くのユダヤ人が移住してイスラエルという国が作られ、イスラエルは人々に認められる国家または民族となりました。救いは個人と集団の両面を持つため、ユダヤ人伝道について考える時は、個人と民族の両面を考えなければなりません。ユダヤ人伝道を考える時、彼らに対する神の約束の本質を、個人と民族という２つの面から考える必要があるのです。

２節）イスラエルが神にとって重要な理由

イスラエルとの契約における神の約束の言葉

（アブラハム契約、モーセ契約、ダビデ契約、新しい契約）

エペソ人への手紙第 2 章 12 節で、パウロは「単一の約束、複数の契約」という表現により、イスラエルと神との歴史的な関係を定義した複数の契約を説明しています。興味深いことに、このフレーズは、それぞれ独自の用語と文脈を持つこれらの複数の契約に、共通の単一の約束が含まれていることを示唆しています。最終的に、その約束はメシア・イエスと、彼を通してもたらされる贖いと回復の祝福を指します。イスラエルの人々と国家にとって、これには「国の存続、土地、王、そして霊的祝福」が含まれます[62]。以下は、アブラハム契約、モーセ契約、ダビデ契約、および新しい契約のそれぞれの簡単な分析と、それぞれに含まれるイスラエルの人々と民族に対する約束が、メシア・イエスにおいてどのように最終的に成就したか、または最終的に成就するかを示したものです。

アブラハム契約。イスラエルと神との関係の土台となる契約は、アブラハムとの契約です。ここで、主はアブラハムを召され、家族、部族、そして最終的にメシアを生み出す民族の奇跡的な父祖とされました。創世記 12:1-3 で、神は彼を祝福し、彼の名を大きくし、彼を通じて神の正義と保護を実行し、特別な土地に彼を連れて行くと約束されました。その地は、後に神からアブラハムと彼の子孫に与えられるものでした(創世記 15:18-21、17:8)。おそらく、これらの約束の中で最重要なものは、アブラハムが他の人に祝福をもたらすということです。神は「あなたによって地上のすべての家族が祝福される」と宣言されました（創世記 12:3）が、それはメシアに基づくものでした。この契約が、世代を超えて永遠に続く性質を持つことは、創世記 15 章と 17 章で明らかにされます。それは、アブラハムに対してなされたのと同じ約束が、息子のイサク(創世記 26:3-5)と孫のヤコブ(創世記 26:3-5)の両方に繰り返されていることからも明らかです。(同 28:13-15)。

モーセ契約。モーセ契約に特にメシア的な希望や約束を見出すのは、見たところ困難で、これをメシア的なものと見るべきでないと考える人もいます。しかしそれは無理なことではありません。申命記 27～29 章の後半の部分は、古代の近東における宗主国と従属国の間の契約の書式に従っており、イスラエルの土地の所有権を維持するために、イスラエルの人々と国家が従うべき一連の契約条項と、それに伴う祝福と呪いが書かれています。しかし、第 30 章はその規範から少し外れ、祝福と呪いが国家に降りかかった後で、神が一連の約束を導入することが言及されているのです(申命記 30:1)。それらの祝福には、人々が土地に現実的に集まること（申命記 30：3-5）と、国民の心が一斉に割礼を受けて、霊的刷新と回復（申命記 30：2、6-10）が起こることが含まれますが、それはメシアを通してのみ実現可能です。また、モーセの歌の終わり（申命記 32:43）には、イスラエルと諸国民が、一致してイスラエルの神を礼拝することが示唆されています。トーラー自体が、律法の条項が定められる前にアブラハム契約による希望の約束を内包しているのです(ガラテヤ 3)。

ダビデ契約。ダビデ契約が示すメシアの特性は、神と父子関係を持ち、不義のために苦しみ、永遠の王となり、永遠の王座に座り、永遠の王国を支配するというもので、非常に具体的です。(サムエル上 7:12-16; 歴代誌上 17:11-14)。歴代誌上 17 章の箇所は、この約束がイスラエルの人々と国に及ぼす影響に関する追加情報を提供しています。イスラエルは脅威のない安全で永続的な住居を与えられ(歴代上 17:9-10)ます。ダビデはさらに、神の約束と忠実さの結果、イスラエルが諸国の中で祝福を受ける様子をも述べました(歴代誌上 17:21-22, 24)。さらに、このダビデ的なメシアは、イスラエルの国家の現実的および霊的な回復に関する後代の預言で、重要な役割を果たすことになります（エゼ 37:24-28)。

新しい契約。新しい契約(エレミヤ 31:31-36)に伴う最も明白な祝福は、十字架につけられ復活したメシア・イエスを通して私たちが経験する個人的な救いです。しかし新しい契約もまた、イスラエルの人々および民族と関係しているため、以上で議論した各契約で言及された事柄を反映する追加要素もあります。

それらには、神がユダヤ人を保護されること(エレミヤ 31:35-37)、彼らの罪を赦し、国民の心を変えるという約束(エレミヤ 31:33-34、エゼキエル 36:25-27、ロマ 11:25-27)、そして終末または千年王国において、イスラエルが約束の地に住むという神の約束（エゼキエル 36:24、37:25-26、マタイ 23:37-39、ルカ 13:34-35）があります。新しい契約の約束の成就におけるイスラエルの立場について、パウロは的確に述べています。「神の賜物と召しとは変えられることがない」（ロマ 11:29)。

ユダヤ人として、またイスラエルのメシアとしてのイエス

キリストの心を正しく理解するために、最初に知るべき重要なことは、キリストがユダヤ人として生まれ、ユダヤ人として生き、ユダヤ人として死に、三日目に王の王、主の主であるイスラエルのメシアとして復活されたことです。

誕生について。イエスはユダヤ人の処女マリア（またはヘブライ語でミリアム）から生まれました。彼の誕生は「女の子孫が蛇の頭を砕く」という創世記 3 章 15 節の預言の成就であり、その方はダビデの子としてダビデの町で生まれた(ルカ 2:4、11)のです。イザヤ 9 章 6 節には、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる子供が生まれると書かれています。マタイは彼のことをインマヌエルと呼んでいますが、これは「神が私たちとともにおられる」という意味です（イザヤ 7:14、マタイ 1:23)。申命記 18 章 15 節でモーセは人々に、「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない」と言っています。ペテロはこのトーラーの約束にもとづいて説教し、この約束された人物こそイエスだと教えています。(使徒 3:1-26).[63]

私生涯と宣教のはじめについて。イエスの子供時代についてはあまり知られていませんが、12 歳のときに宮でラビと討論し、偉大な知恵と権威をもって語ったことはわかっています。彼がイザヤ書 53 章 2 節のとおり「新芽のように育ち」、民と共に生きたことは確かです。福音書は、イエスの両親が律法に従っていたことを示しています（ルカ 2:21-24)。彼自身の宣教活動において、彼はシナゴーグで話し(ルカ 4:16-30)、重い皮膚病の患者を癒したあと、律法に従ってその土地の祭司に治癒を報告するようにと言われました(マルコ 1:40-45)。彼は神殿の内で教えました（マタ 26:55)。また、２０世紀にはイエスの活動ついて多くの学者が研究を行い、彼が「ユダヤ人」であったことを指摘しました。

第二神殿時代は分裂の時代であり、神殿の行事はパリサイ派とサンヒドリン（ユダヤ最高法院）に分かれていました。他のラビに信者がいたのと同様、イエスは弟子を持ったラビと見られていました。イエスは神殿と非常に密接な関係を持ち、神殿について預言し、神殿の中で神殿について教えました。そして、ゼカリヤ 9:9 の成就としてロバに乗ってエルサレムに入城された後、神殿で両替商たちの机をひっくり返して神殿を清められたのです。イエスと神殿との密接な関係は、神殿と祭司職および他の役職に対するイエスの究極の権威を物語っています。神殿は至高の神の住居と考えられていました。イエスは十字架上で「ユダヤ人の王」という罪状書きと共に死にましたが、それは彼がメシアであることを示しました（マタイ 27:37)。また、彼の復活は死に勝つメシアの力の究極の印であると共に、人類の罪の代価でした。神が彼を死からよみがえらせたことは、彼がメシアであることの神からの認定であり、それは彼を神の右に座らせ、神の救いの祝福の仲介者とするものでした。そして、イエスが与える罪の赦しを受け入れる人々には、神の霊が内住するのです(ルカ 23:47、使徒行伝 2:16-38、10:34-48、11:1-18 参照。ここで、ユダヤ人信徒が受けるのと同じ恩恵が異邦人にも与えられる)。

イスラエルとその回復の希望に関するイエスと使徒たちの教えについて。イエスは、「神の訪れの時」を知らなかった民について語っています（ルカ 19:41-44)。しかしイエスは、救いの約束を成就する方であ

り、民がついにメシアを受入れる希望をも示されました。それは、３つの「～まで」という言葉に示されています。その２つはイエスの言葉で、１つはペテロの言葉です。ルカ 13:34-35 と、その並行個所であるマタイ 23:37-39 で、イエスは民が裁かれ諸国に離散し彼らの家が荒れ果てることを宣言する時、彼らが『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』と言う「まで」とも言われたのです。

この「荒れ果てた家」はエレミヤの預言(エレミヤ 12:7、22:5)に関係しており、また祝福の言葉は詩篇 122:26 の引用です。イスラエルに対する裁きは、彼らが民として神に応答するまでの、一時的なものだとイエスは語られたのです。それはイスラエル民族に希望を与える言葉でした。ルカ 21:20-24 は「異邦人の時が満ちるまで」エルサレムが国々に侵略される様子を描いています。これは、聖都に対する異邦人の支配の時がいつか終わり、その後には、ユダヤ人が戻って来て聖書のイスラエルに関する預言が成就する時代が来ることを示唆しています。

一方、ペテロは使徒行伝 3:18-22 の説教で、イエスが「万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません」と語りました。彼は、その「改まる時」つまり回復の時が、昔の預言者の書に記されていると指摘しましたが、預言者たちが将来の救い完成を語った時、彼らはいつも、そこにイスラエル民族の役割を描き出しました。イザヤ 2:1-4 および 19:18-25 のような言葉は、神を礼拝するために世界の民族が平和にイスラエルに集う様子を描いています。復活後、イエスが弟子たちと一緒にいた 40 日の間、イエスが彼らに教えたことの中に、イスラエルが神の王国で役割を果たすことを否定する言葉はありませんでした。それは、使徒行伝 1:6 の彼らの質問（とイエスの答え）にも示されています。

これらの御言葉は、イエスが神の計画の中心にいる、約束の成就者であり、イスラエルの人々と民全体にいつも希望と約束を教えていたことを示しています。約束の成就に関するどんな主張も、イエスによる救い抜きには成り立たず、彼の言葉を無視することはできません。だからパウロがいつもシナゴーグから伝道活動を始めたのは偶然ではありません。彼がそうしているという事実は、救いに関して「二契約神学」的なアプローチが、ありえないことを示しています。以上のことは、ユダヤ人伝道の必要性を示す重要な神学的論拠です。

ユダヤ人に対するパウロの希望（ローマ 9-11）について。この個所の前、ローマ 1-8 章で、使徒パウロは創造の神学から始めて、生、死、救い、弟子となること、そしてキリストにある新しい命に関する包括的な教義の基礎を述べています。そして第 9 章から第 11 章では、神の贖いの計画におけるユダヤ人の役割、つまり、ユダヤ人にはまだ役割があり、創世記で彼らと結ばれた永遠の契約のゆえに神は彼らをお見捨てにならないことが、具体的に述べられています。これらの章は、福音に関する当時の出来事の文脈の中で組み立てられており、「神の訪れの時を知らなかった」(ルカ 19:41-44)、つまり民族としてメシアを認めず受け入れなかったユダヤ人について論じられています。パウロは自分の苦悩（第 9 章)、伝道に向けた祈りの励まし (第 10 章)、神の主権的な計画に対する永遠の希望 (第 11 章) について語っています。これらの章は、ユダヤ人に対する神の御心を理解する上で極めて重要であり、使徒パウロはそれを熱く語っているのです。

ローマ人への手紙 9 章は、パウロが自分の民イスラエルに関する苦悩と悲しみを語る言葉から始まります。「私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。彼らはイスラエル人です。」(ローマ 9:1-4)。パウロは、自分の民が救われるのであれば、自分自身の救いを喜んで犠牲にするほど、ユダヤ人の救いを切望していました。自分の民が永遠に破滅するという思いが、彼に大きな感情的、精神的、霊的な苦悩をもたらしたのです。イエスの初降臨のと

き、ユダヤ民族は全体として、イエスを彼らのメシアと認めませんでした。

この章は、一般的に選びと予定説の観点から論じられることが多いのですが、それを書いたパウロの悲しみを理解することは重要です。イスラエルの民は選ばれ、神のトーラーの啓示（ローマ 9:4-5）を受けたのに、イエスによる救済をもたらす信仰に、(パウロの時代においては) 至ることができなかったのです。だから、もしも許されるなら、パウロは自分の兄弟姉妹の救いのために、実際に自分の救いを失うことさえ望んだのでした。しかし、この苦悩の中でも、パウロは神の正義と憐れみの中に希望を持っていることがわかります。それは、「イスラエルの子孫がすべてイスラエルであるわけではない」ためです。これは、子孫が血統ではなく、信仰によって決まることを意味するからです（ローマ 9:8-9)。この章の残りの部分を通して、パウロは選びについて、また神の主権による憐れみと正義について説明し続けています（ローマ 9:21-22)。その段落は、イスラエルの現在の状態に関する修辞的疑問文で終わります。パウロの悩みは、異邦人がどうしてキリストに加えられるかという問題ではなく、イスラエルの人々の中の不信仰から来ているのです。

パウロは、彼の「心の望み」と「神に願い求めること」はイスラエルの救いだと繰り返し述べます（ローマ 10:1)。そして、ユダヤ人が「神に対して熱心」だが、「その熱心は知識に基づくものではない」(2 節) と説明します。これは、ダマスコ途上でイエスに出会う前の彼自身の神への熱意と似ています。ローマ人への手紙 10 章は「信仰のみによる義」、つまりユダヤ人も異邦人も同様に、救いの福音を聞き、心で信じて受け入れる必要性について、最も明確に語る箇所でしょう(ローマ 10:9)。しかし、福音を聞くためには、宣教によって御言葉が伝えられなければなりません。パウロの言葉は、ユダヤ教とモーセ契約だけでユダヤ人は救われるという主張（二契約神学）に対する反証です。この主張は、第二バチカン公会議の後で一般化しましたが、それはホロコーストで煽られた人種的な反ユダヤ主義に結びついたキリスト教の反ユダヤ教的な傾向を沈静化するための主張でした。ホロコーストの惨劇の再発を防ぐため、ユダヤ人たちに「強制改宗」の恐れを感じさせないため、という理屈から、ユダヤ人伝道の意義を軽視するこの主張は神学的に支持されました。この動機は理解可能ですが、仮にそれが善意から来ていたとしても、この主張は神学的に健全なものにはなりえません。ユダヤ人が御父に義と認められ、救いと永遠の命を受ける唯一の方法は、メシアであるイエスを通してなのです。実際、メシアとして来られたイエスは、特に最初にユダヤ人を対象に活動されたのでした(ローマ 1:1-17)。

ローマ人への手紙 11 章は、この苦悩、祈りによる希望、そして宣教の勧めを締めくくる最高傑作の説教で締めくくられています。11 章の冒頭の言葉は希望を表現しています。「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。」(ローマ 11:1-2)。パウロは、神がユダヤ人全体を拒絶しなかったことの証拠として、彼自身の証を示しました。神はエリヤの時代に「バアルにひざをかがめなかった七千人」を自分のために用意されたのと同じように、ユダヤ人の「残された者」を救い続けておられた(ローマ 11:4、列王記上 19:18) のです。パウロは、この「残された者」であるユダヤ人信徒が「神の恵みの選び」によることを論証します(ローマ 11:5)。当時のレムナントは、パウロにとって物語の終わりではありません。ローマ人への手紙第 11 章 15 節でパウロはこう続けています。「もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることでなくて何でしょう」。

ここで読者が理解すべき鍵は、パウロが台木の元の枝が、再び接がれる期待を語っているということです。パウロは明らかに、未来のある時点で大多数のユダヤ人がついにイエスを受け入れる可能性に関心を持っているのです[64]。これにより、イスラエルは「みな」救われます。この箇所の「イスラエルはみな」をどう解釈したとしても、ユダヤ民族はそれに含まれます。枝の比喩は、パウロがユダヤ人の大多数が信

仰を新たにされる時を予見しています。使徒パウロは、その時点で存在したよりもさらに多くの忠実なイスラエルの「残された者」が起こされる、希望に満ちた姿を描いています。彼らは、神の永遠の約束と契約に従って、再臨の時に信仰を持つのです（ローマ 11:28-29)。パウロはまたローマ人への手紙 11 章で、異邦人の信者に対して高慢になることを戒め、ユダヤ人の「一部がかたくなになった」のは、「異邦人の完成のなる時」までのことだと理解するよう勧めます。再臨までの間、ユダヤ人が福音を聞いてそれを受け入れることは、必ずしも一般的ではないかもしれません。だから、忍耐、愛、不屈の精神を持ち、苦悩をもいとわず宣教を続ける必要があるのです。

「イスラエルはみな」を霊的にユダヤ人と異邦人の両方の信徒を指すと解釈する人もいますが、パウロはこの部分全体でユダヤ人と異邦人を別々の民族グループとして区別して論じているため、文脈がそのような解釈を許していないと私たちは信じています。さらに、すでに述べたように、イエス自身も同様に、「異邦人の時が満ちるまで」エルサレムが踏みにじられることについて語り（ルカ 21:24)、彼の帰還をユダヤ人の民族的悔い改めと結び付けました（ルカ 13:35)。同様に、預言者ゼカリヤは、イエスの再臨に関連したユダヤ人の将来の救いについて次のように書いています。「その日、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く」（ゼカリヤ 12:9-10)。突き刺された者も、再び来て民を裁かれるのもイエスです（マタ 24:29-31、マルコ 13:24-27、ルカ 21:25-28、使徒 3:18-22)。パウロは大きな希望を持ってイスラエルが民族的に救われる日を待ち望み、その希望に動かされて、ユダヤ人に福音を宣べ伝え、他の信者にも同じことをするように勧めたのです。

これらの章は全体として、ユダヤ人に対する希望を決して失わず、心を柔軟に保つよう勧めています。ユダヤ人伝道は簡単な仕事ではありません。私たちは「残された人々」に説教しているのですが、彼らの心は、他の多くの人と同様にメッセージに対して「かたくなに」なっているので、多くの困難があり、落胆もあるでしょう。それでも、使徒パウロが教えるように、あきらめてはなりません。救いの希望が無いユダヤ人は一人もいません。これらの章でパウロが使う「イスラエル」に、メシア・イエスをまだ知らない私たちのユダヤ人の家族や友人たちの名前や顔を思い浮かべると、その言葉が生きてきます。パウロが私たちに求めているのは、私たちが情熱に満ちて祈り、福音を分かち合う勇気を持つことです。御父への道はただ一つであり、天の下には他の道も名前もありません(使徒 4:12)。これらの章を完全に理解すれば、私たちが前進し、まずユダヤ人に、そしてギリシャ人にも「良い知らせ」を伝え続ける力が与えられます（ローマ 1:16)。

イスラエルは、神の永遠の恵みを示しています。イスラエルに関するすべてが、神の恵みを思い起こさせます。アブラハムは、神の恵みによって民の父として選ばれました。国家の成立と、民族の形成に対する神の揺るぎない支援が、モーセ五書の物語です。国家の歴史は歴史書に書かれています。神が継続的にイスラエルを支えることと、神の前における民の責任とは、預言書に記されています。最も重要な、神の恵みによる支えという主題はホセア書にあります。神の民イスラエルが不信仰を繰り返す中でも、神はいつも忠実なのです。ホセアとゴメルの結婚は、神と民の関係の隠喩です。民の不貞に直面しても、神は民に忠実です。ホセア 14 章は、浮気なエフライムにさえも希望を示します。神がイスラエルに希望をお与えになることは、神の忠実の恵みを示し、失われた者を探し求める熱心を示しているのです。ホセアの預言は、私たちが神の恵みに値しない時でも、神が私たち全てに、手を差し伸べて下さること描いています。

３節）現在の議論

本節ではまず、各教派がイスラエルに関して議論があった際に出した声明の例を紹介します。次にケープ

タウン決意表明（CTC）を取り上げ、グローバルな視点から考えた後、イスラエル民族を取り巻く現在の問題を検討します。世界の多くの地域では、ユダヤ人伝道について直接的に議論がなされていないため、ユダヤ人伝道についてのグローバルな視点が必要です[65]。その視点を示すことが、この文書（LOP67）が作成された理由のひとつでした。

イスラエル国家に関する各教派の福音的見解と、それがユダヤ人伝道に及ぼす影響

南部バプテスト。南部バプテスト連盟(SBC、または単にバプテスト)は、米国でずば抜けて大きいプロテスタント教派です。100 年以上もの間、バプテストはユダヤ人への伝道を支持してきました。イスラエル国家が樹立される前に、バプテスト派はユダヤ人の扱いと、イエス・キリストによる彼らの救いの必要性について懸念を表明しました。これは、ホロコースト前、およびホロコースト中に地方の州大会の声明と決議で、特に顕著に見られます。たとえば 1938 年のノースカロライナ州大会での声明は、次のように述べています。

> 「現時点での人種的反感の最も明白な表現は、ユダヤ人に対して多くの人が持つ偏見と、現在ドイツ、ポーランド、およびその他の国々でユダヤ人に加えられている恐ろしい迫害に見られます。私たちは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの福音が人種的憎悪からの十分な救いを提供していることを喜んでいます。この福音が宣べ伝えられ、すべての民族に受け入れられて初めて、人種的憎悪が消え、すべての人種が共に生きることができると信じ、それを待ち望んでいます。」[66]

この声明の時点で、世界のユダヤ人人口の大半はヨーロッパに住んでいました。南部バプテスト連盟のノースカロライナ州大会の声明は、人種差別の最も明らかな形態はユダヤ人迫害だと指摘しました。州大会はさらに、人種差別のあらゆる原因に対する治療法はキリストの福音であると付け加えました。これは、バプテスト教会の二重の懸念を示しています。彼らは、歴史的にキリストとつながっていたユダヤ人の現実的な安全と同時に、彼らの永遠の安全（救い）についても考えていたのです。

ユダヤ人に対する現実的、また霊的な懸念は、南部バプテスト連盟の一貫した姿勢です。2016 年の南部バプテスト大会の年次総会で、イスラエルとユダヤ人に関する決議が作成されました。彼らは、イスラエルとそこでビジネスを行う企業との取引や投資を排除しようとするＢＤＳと呼ばれるボイコット運動に警戒を表明しました。また、イスラエル国家の生存権を認め、彼らが国を守るための防衛力を持つことも支持しました。決議の最後の複数の個所には、「イスラエルの救い」と「エルサレムの平和」のために祈ることが宣言されています。（ローマ 1:16）.[67]

南部バプテスト連盟は、イスラエル建国以来、一貫してユダヤ人を支持しています。イスラエル国家の生存権、中東の政治的問題に関係なく、ユダヤ人が福音を受け取る必要性も認めました。

アングリカン・コミュニオン（聖公会の国際組織）。聖公会は、英国国教会、聖公会、または場所によっては他の多くの名前でも知られており、数千万人の信徒を持ち、世界中でカトリックと正教会に次いで３番目に大きなキリスト教派です[68]。ユダヤ人伝道最初期の、世界的に最も注目すべき宣教組織の一つは、1809 年に英国国教会によって設立されました。それはロンドン・ソサイエティ（London Society for Promoting Christianity Amongst the Jews）として知られる団体です。ユダヤ人にキリストを伝える彼らの活動は 20 世紀の初めまで続き、中東から英国に至る広い地域に広がりました[69]。

しかし、彼らのユダヤ人伝道に対する態度には変化がありました。1990 年代には、以下のような出来事もありました。

1991 年から 2002 年までカンタベリーの第 103 代大主教を務めたジョージ・キャリー博士は、カンタベリー大主教としては 150 年ぶりに、英国国教会のユダヤ人伝道部門の後援者になることを辞退しました。当時の報道によると、英国国教会の最高位である大司教は、ユダヤ人伝道団体の宣教活動を支持することが、宗教間の関係に害を与えると感じたようです［70］。

彼の後継者であるローワン・ウィリアムズ博士は、イスラエル軍によって使用されているブルドーザーの製造会社への投資を中止するという教会会議の決定を支持しました[71]。それが、イスラエル国家の行動を批判する流れを作りました。このような傾向について、(北米聖公会の) ジュリアン・ドブス主教は「聖公会総会と運営委員会は共に、イスラエルの行為を理想国家の水準で判断し、その敵勢力の行為は全て容認する顕著な傾向を示した」[72]と批判しています。

キャリー大主教に関する批判は事実かもしれませんが、2002 年に彼が行った宣言では、教会が「イスラエル国家の平和と安全への願いを尊重し、イスラエルの存在に対する敵意をやめるべきだ」と述べています。
最近の歴史において、英国国教会は、イスラエルとパレスチナに関する議論の両方に関わり、双方の願いを理解するよう努めつつ、平和への願いを表明してきました。
2019 年に英国国教会から出版された『神の不滅の言葉』という書は、ユダヤ人に福音を届ける決意を示しながらも、ユダヤ人の独特の歴史とイスラエル国家との関係にも配慮しており、次のように述べています。

> キリスト教徒は、イスラエル国家に関する多くの現代の問題に対して異なるアプローチを取るが、次の事柄は認めるべきである。a)ほとんどのユダヤ人がシオニズムをユダヤ人のアイデンティティの重要かつ正当な側面と見なしていること、b)イスラエル国家は国際法の共通原則に従って認められた国境内で、安全に生存する権利を有する。…[74]

また、次のようにも述べられています。

> イエス・キリストにある神の救いの愛は全人類に、異邦人にもユダヤ人にも及ぶもので、それあかしすることは教会の召命である。教会は、キリストにあって私たちに近づいてくださったイスラエルの神と、その神とユダヤ民族が特別な関係にあることを感謝とともに思い起こす。ユダヤ民族を脅かし、神との独特な関係に無知であると見られるような態度を取らないよう……注意しつつ行動する特別な責任が我々にはある。[75]。

今日、ロンドン・ソサイエティの活動は、ＣＭＪ（Church’s Ministry Among Jewish People）という名前で知られており、今も英国国教会聖公会の 10 の主要な宣教分野の一つとなっています。[76]。

教派を超えて：米国における福音派クリスチャンの調査

米国において、福音派は統一された教派ではありませんが、福音主義のキリスト教徒は、米国のキリスト教徒全体の中でかなりの数を占めています。福音主義のクリスチャンは多様な教会に所属し、多くの人種から構成されています。たとえば、南部バプテスト教会に通う人もいれば、超教派の教会に通う人もいるのです。その数は、米国では 9 千万人から 1 億人程度とされます。[77]。

2017 年の Lifeway Research によると、福音派キリスト教徒の 73%が、キリスト教徒がテロリストや外国の敵からイスラエルが自衛することを支持すべきだとの意見に同意し、ほぼ同数がパレスチナ支配地域

のキリスト教徒にも関心を持っています。調査対象者の 76%が、キリスト教徒は主権国家であるイスラエルに住むユダヤ人の権利を擁護すべきだと考えています。[78]。

この世論調査は「福音派キリスト教徒」を対象にしていますが、それは「聖書が人の生き方を定める権威を持つ」、「救いの唯一の道であるイエス・キリストを信じるよう、非キリスト教徒に証言する必要を認める」など福音主義の中心信条に同意しているという意味です。

調査の第 2 部では、福音とユダヤ人に対する福音派の態度について質問しました。71%が、ユダヤ人に福音を伝えることが重要であるという考えに「強く同意」しました。[79]

福音派におけるユダヤ人国家への支持と、ユダヤ人の伝道の必要性に対する態度は密接に関連していました。しかし、回答者のうちでユダヤ人の友人を持っていたのは 30%だけでした。

ケープタウン決意表明（CTC）

2010 年にケープタウンで開催された第 3 回世界宣教会議には、世界中の 198 か国から 4,000 人を超える福音派の指導者が集まり、他に数千人がオンライン参加しました[80]。大筋で言えば、この会議の焦点は、一致、伝道、正義、および聖書の真理の擁護に専念するよう教会に呼びかけることでした[81]。会議の終わりに、福音派教会が協力して取り組む目標として、一連の決意表明が採択されました。この文書は広範なものですが、イスラエルとユダヤ人についても言及しています。
（日本語訳は https://lausanne.org/ja/content-library-jp/%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%97%E3%82%BF%E3%82%A6%E3%83%B3%E6%B1%BA%E6%84%8F%E8%A1%A8%E6%98%8E）

決意表明の文書はまず、聖書イスラエルがどのように描かれているかを述べています(CTC I-2-A)。イスラエルは、他宗教との混交と罪に陥り、悔い改めを必要としているという文脈で、今日の教会とも似ています。イスラエルはまた、アブラハムの子孫を通して神が諸国民に救いをもたらすというアブラハム契約に関して言及されます(CTC I-4-A)。ユダヤ人と異邦人の関係も論じられており、両者が違いを持ったままで一致する必要性が強調されています(CTC IIB-1-A)。そして文書は、異邦人キリスト教徒がメシアニック・ジューたちを愛し、支援する必要性を明記しています。

決意表明の文書は、信仰を持たないユダヤ人と教会との関係も論じています。キリスト教徒は、大宣教命令の対象に含まれるユダヤ人への伝道を求められています。そして、ユダヤ人に対する歴史上の残虐行為と、それを助長したユダヤ人に関する誤った神学が非難されています(CTC IIb-2-A)。しかし、文書の同じ部分で、パレスチナ人の苦しみはキリスト教徒の不作為のために続いているとも言及されており、クリスチャン・シオニズムとパレスチナ人の苦難の関係を暗示している可能性があります。中東における難題は、イスラエルの安全と治安や民族の権利を尊重すると同時に、地域の他のすべての民族の正義をも尊重する必要性で、両面のバランスを取る必要があります。

ケープタウン決意表明は、神のご計画においてイスラエル民族が特別な地位を今なお持ち続けているかどうかについて、見解を示していません。世界の未来や千年王国についての議論は、イエスが再臨される時、彼が統治を確立し、世界を回復されることを確認するという、必要最低限の内容です(CTC I-4-A)。ですから、LOP67 のユダヤ人伝道とその神学的根拠に関する本章の議論は、その欠如を補うものとなっています。

現代の政治状況への、様々な対応

イスラエル国家と、そこに集められた人々に対する見方が、ユダヤ人伝道に対するに見方に影響を与えることがよくあります。中東やイスラエルで働いている人は誰でも、この地域について多様な見解があることを知っているでしょう。親アラブ／パレスチナから、親イスラエルまで様々な見解があります。土地、平和、安全、正義、和解、賠償が議論されます。少なくとも 6 つの異なる立場があります。パレスチナ人にとっての正義、パレスチナ解放の神学、イスラエル・パレスチナの和解（ウブントゥ）の観点、平和運動家や監視団体、クリスチャン・シオニズムなど親イスラエルの政治団体、そしてメシアニック・ジューの立場です[82]。

議論されている問題は、東エルサレムとヨルダン川西岸地区のイスラエル人入植地、パレスチナ人の帰還権と難民の地位、近隣諸国のイスラエル国家承認（国交）、エルサレムの扱い、パレスチナ自治区の人々の生活、ハマスや自爆テロと暴力の脅威、イスラエルの治安問題、そしてこれらの複雑な状況への対応策をめぐるイスラエル社会の分断などです。中東の長い争いの歴史は、この地域の様々な勢力によって非常に異なる視点から見られているため、その見方の違いで諸問題はさらに複雑化します。地域の問題解決が難しいのは、地域内の多様な視点の整理が難しいからなのです。

この多様性の側面はローザンヌ運動内にも存在しますが、そのような中で LCJE が結成されたのは、イスラエルへの宣教に、運動全体の注目を集めるためです。これは、この文書（LOP67）全体が作成されたもう 1 つの理由であり、そのためケープタウン決意表明の中の様々な観点からの議論を取り上げています。以下の段落は、LCJE 内における私たちの決意を要約するものであり、本章の残りの部分は、LCJE 内でこの決意表明を行った理由を説明しています[83]。

> 「個人レベル、あるいは民族レベルのユダヤ人の救いの希望に動かされて、パウロは福音を人々に伝えた。それと同様、我々は緊急課題としてユダヤ人に福音を伝えるべきだと主張する。それは、神と私たちの関係によりユダヤ人に「妬み」を起こさせることによってである(ローマ 11:11, 14)[84]。今日、ユダヤ人が救われるためには、メシア・イエスを信じなければならないと、パウロは明言した。イエスを信じるためには、福音を聞く必要がある。福音を聞くために、クリスチャンはそれを彼らに宣べ伝える必要がある(ローマ 11:14-17)。ゆえに我々は、ユダヤ人に対する神の将来の計画、神の救いがもたらすべき完全な和解の大きな働きの一環として、ユダヤ人伝道の必要性を主張する。」

４節）神の和解のプログラム

イスラエルの救いの重要性：教会と神の民の宣教学的・神学的意義について考えます。

ユダヤ人と呼ばれ、イスラエル民族というアイデンティティを持つ人々、イスラエルの重要性は、ローマ人への手紙 9-11 章以外にも、エペソ人への手紙 2 章 11-22 節に述べられています。その前の 8-9 節では「恵みによる」救いと「信仰による」救いについての中心的な教義が語られ、さらに 10 節では、私たちがキリストにある神の作品であり「良い行い」をすることが神の計画だと説かれます。次に、11-12 節では異邦人という集団的な視点が語られます。13 節によれば、異邦人はそれまで祝福の対象外であり、「イスラエルの国籍がなく」「以前は遠く離れていた」のです。しかし今は、キリスト・イエスにあって新しいことが起こりました。遠く離れていた人々（異邦人）と「近くにいた」人々（ユダヤ人）は、敵意という障壁が取り除かれて 1 つのグループ、一人の新しい人になったのです（14-18)。集団的レベルでの救済の核心は、以前は疎遠だった 2 つのグループ間の和解です。その結果、両者はキリストの働きを通して、一つの聖霊により御父に近づくことができるのです（17-18)。

この和解の働きは、私たちが救いの結果として歩むべく準備された最初の具体的な「良い行い」です。そ

の結果として実現する平和は、個人と神の間だけでなく、グループと神の間、つまり諸民族とイスラエル、異邦人とユダヤ人との間にも及びます。一人の新しい人は、神が新たな集団的実体として創造されつつあるもので、それは被造物全体の中で疎外から平和への動きを示すものであり、異邦人とユダヤ人がその典型的な例となっているのです。イスラエルがいなければ、この歴史的で完全な和解の神学的な意義の一部が失われてしまいます。福音を受入れるすべての人は、神の豊かな祝福にあずかる者となるのであり、その和解の姿は、神がそこに働いておられることを世界に示す証となるのです。これは、ユダヤ人伝道が重要であって、神学的な根とも言える神の計画の一部であり、世界における神の働きの証であることを意味します（エペソ 3:7-10)。異邦人は今やキリストにある祝福の新たな受取人となっていますが、一人の新しい人は「近くにいる」人々がいなければ不完全なのです(ルカ 2:30-32)。それは、すべての被造物を回復される神の忠実性の現れであり、それゆえに、イスラエルを含む全民族に対する宣教は不可欠です。

５節）イスラエル国家の土地と将来に関する疑問

神の計画における土地とイスラエルの役割が、最近クリスチャンの間で重要な論争となっているのはなぜでしょうか。この論争には、３つの議論が関わっています。第一は、契約の意味に関する議論、第二は神の約束に対する忠実性に関する議論、第三は聖書本文の解釈に関する議論です。それらは、将来におけるイスラエル国家の役割と、それがユダヤ人伝道に及ぼす潜在的な影響をどう見るかという問題の枠組みを理解するのに役立ちます。この項で取り上げた問題はキリスト教徒の間で議論されていますが、その議論は伝道に対する議論に終末論的な軸を加えます。イスラエル民族と国家を擁護する議論は必要であり評価すべきものですが、それは救いに伴う回復の範囲を理解すること、ひいてはユダヤ人伝道の重要性をどう理解するかにも影響を与えるものです。

第一の議論は神の約束または契約の性質です。契約は、この議論において重要な要素です。まさにその概念自体が、2 つの当事者が契約条件を規定する「パートナーシップ」を形成する合意について語っています。結婚式の誓いを例にすると、両者の合意関係を説明するのに役立つかもしれません.

花婿だけが誓いを立て、花嫁に何の条件も課さない場合、それは無条件の誓約となります。確かに、どちらかのパートナーが不誠実である場合、婚姻関係の利点は損なわれてしまいます。忠実な愛が失われると、結婚の喜びと祝福も失われてしまいます。しかし、パートナーの一方は、交わした誓約に忠実であり続け、相手の選択に関係なく忠実であり続けるとしましょう。これはアブラハム契約を表しています。パウロは、ガラテヤ 3:17 で 2 つの契約を区別しています。1 つは約束の契約であり、もう 1 つは律法に関係した規定としての契約です。

神がアブラハムと契約を結ばれたとき、それは一方的なものであり（創世記 15 章)、神の示した契約条件は無条件でした。それは彼の愛によって始められたものであり、イスラエルの属性や彼女の従順にさえも依存しないものでした(申命記 7:7-8)。神はイスラエル側の愛ある従順を期待されました。イスラエルが不誠実であること、公然と反抗的であること、さらに他の神々を愛することによって、神の愛に応答する愛を持たなかったときも、契約は依然として損なわれませんでした。あらゆる場面で、イスラエルの民は不誠実であることが証明されました。これは、民族のために自ら犠牲を払うことにより、彼らの罪の贖いをされたメシアを拒絶した時に、最高潮に達しました。結局のところ、この計画は罪を取り除き、赦しを与えるためのものでした。そして、契約によるイスラエルの召しは残ったのです。その、取り消されない召しは、ローマ人への手紙 11 章 29 節に明記されており、パウロが書いた時代から現在に至るまで続いていることは明白です。

この個所に「シオン」という、イスラエル内にある特定の現実的な場所が言及されていることは、特筆すべきことです。また、この旧約聖書の約束には、約束の地への帰還の目的、ヤコブから不敬虔を取り除き、罪を取り除くことが明記されています。この契約は、全イスラエルに対する神の契約と呼ばれています。そしてパウロは主張します。イェシュアを拒否する当時や現在のユダヤ人は、イェシュアを受け入れたユダヤ人とは全く違うものとして対比されますが、神の長期的な「選び」という観点から見れば、どちらも最愛の「選びの民」なのです。それはすべて、神が明示的に彼らと交わした古代の無条件の契約の約束があるからなのです。

第二の議論は、神のユダヤ人への約束に対する忠実性についてです。神は御言葉を守られます。約束することと、それを守ることは別です。神がもし契約した約束の一部でも果たさなかったなら、神が将来他の人に与えた神の言葉に忠実であると信じる理由はありません。この観点は、元の契約の約束に含まれる国家と土地の神学的議論には不可欠です。イスラエルに対するこれらの約束が守られないのなら、信じる者に永遠の命を与えるという、現代の信徒に対する神の約束もまた、守られない可能性があるのです。

約束と契約は同じではありません。合意文が契約の実体ですが、それには一方的または条件付きで履行される約束が含まれています。アブラハムとの契約は、服従に対して祝福を与えるものですが、民が不従順でも土地を含む約束を神が取り消されることはありません（一方的な約束）。一方、モーセとの契約では、民が祝福を受け、呪いを避けるためには、従順である必要があります（条件付き約束）。一部の人々は、アブラハム契約はすべてイエスにおいて成就したと示唆し、契約は役目を終えたと考えます。その通りではありますが、イエスにおける成就と教会への祝福によって、イスラエルの希望が無くなったわけではありません。パウロは、メシア・イエスを信じるすべての人はアブラハムの霊的な子供であると言いました。ゆえに、アブラハムの子孫と全信徒の両方が、信仰によって義と認められるのです（創世記 12：3、ガラテヤ 3：6-7）。そしてパウロは「契約と約束」を結びつけ、救いが「神は御言葉を全て実行される」という確信に基づいていると指摘します。アブラハムにとっての契約は、単に彼がすべての民族に祝福をもたらすということだけでなく、神が彼を通して作られる新たな民族が、境界を持つ特定の土地を受け継ぐことも含んでいました(創世記 12:1、7; 13:15; 15 :18; 17:8)。しかし、その境界線は、ユダヤ人の歴史において一度も実現されたことはありません。

その約束は繰り返されているでしょうか。旧約聖書を通じ、土地の約束は何度も繰り返され、アブラハム以外の人にも語られています。神はイサクとヤコブに同じ約束をされました（創世記 28:38; 35:12)。歴代誌上下の著者は、その約束がイスラエルに対する永遠の契約であったと、繰り返し述べています（歴代誌上 16:16-18、歴代誌下 20:6-7)。

ここで重要な注意事項があります。現代のイスラエル国家を、その存在が生み出した熱気の中で見ると、議論の中でユダヤ人だけを支持して、イスラエルの非ユダヤ人住民を過小評価したり、議論から除外したりする誘惑に駆られます。しかし、すべてのクリスチャンは、アブラハムに約束された土地の現在の住民が、ユダヤ人、パレスチナ人、アラブ人、その他の民族グループで構成されていることに注意する必要があります。イスラエルの将来について私たちがどのような見解を持っているかにかかわらず、すべてのクリスチャンは、その土地の現在の住民を尊重し、愛と正義を広め、福音を分かち合うよう努めなければなりません。すべての人は神のかたちに造られたものであり、それゆえすべての人が神にとって貴重なのです。メシアの愛は、民族的背景や人種的背景を超えたものです。十字架につけられ復活されたキリストは、すべての人のために来られたのです。

それでも、ユダヤ人が今、不信仰の状態で帰還し（エゼキエル 36 章)、国家が再生していることは、メシアの帰還と神の救いの計画の完成に向けた熱い期待感を高めています。もし、これらの出来事が終末の予

兆であるなら、伝道は緊急の課題です。神が最初に御言葉を受けた人々に、その御言葉を守られることの重要性は、いくら強調してもしすぎることはありません。福音が真実かどうかは、まさに神が約束を守られるかどうかにかかっているからです。

ありがたいことに、今日の信徒に対する神の忠実は、信徒の完全な服従に依存しているわけではありません。イスラエルが反逆し、神に罪を犯したように、今日の信徒もまた神に背を向けています。それでもイスラエルは最終的にその土地を所有して住むのであり、メシアを信じる人々も最終的に平和に住み、神や他の人々と和解します。もし、神がイスラエル民族に対する約束を忠実に守られないなら、信徒に対する約束を守られる保証はありません。これは、ローマ 8 章から 9-11 章へとつながるパウロの論調の核心部分です。彼は、神が約束を守られることを論証し、集団的・民族的レベルで神のご計画を説いているのです。

第三は、聖書本文の解釈に関する議論です。考慮すべき聖書箇所があります。イスラエル民族の将来の役割の議論において、土地の重要性を軽視する人々は、契約の特性、特にアブラハム契約の一方的な性質を誤って適用し、神の救いの範囲を矮小化する危険を冒しています。

ローマ人への手紙 4:13 のパウロの言葉をもとに、アブラハムが神の約束により相続するのは、イスラエルだけでなく全世界だと強調する人々がいます。イスラエルの境界をはるかに越え、全世界に福音が広められたことで、土地の約束は過去のものになった、というわけです。だから将来のイスラエルに関して、領土を強調してはいけない。イスラエルの将来の領土だけを焦点とする解釈は、すべての民族に対する福音の証しを阻害する可能性があると、彼らは主張します。

また、イエスはイスラエルに土地を与える約束に言及していないとの主張も時々、耳にします。しかし、イスラエルに対する彼の霊的使命は、イスラエル国家の政治体制とは何の関係もありません。王国を確立し、政治的支配権を握るように求められても、イエスは拒否しました（ヨハネ 6:15)。彼はピラトに、自分の王国はこの世のものではないと言いました（ヨハネ 18:36)。復活後，イスラエルに王国を復興する時期について使徒たちから質問された時、時や場合は父が『定めている』とイエスは言いました。まだその時ではなかったのです。キリストの地上での宣教に関して、創世記 15 章の明確に定義された境界を持つイスラエルの土地を強調することに対しては、多くの反対論が可能です。それらは、多くの忠実なキリスト教徒が持つ見解で、置換神学、あるいは成就論（キリストが約束を成就されたとする見解）などと呼ばれています。しかし、それらを論拠にして、民族あるいは国家としてのイスラエルの希望は無くなったとする見解について、私たちは疑問を持っています。

真のぶどうの木であるイエスと、ぶどう畑であるイスラエルが対照的に描かれるのは、ある特別な時代についてであることに注意する必要があります。イエスである神殿は高められ、ヘロデの神殿以上のものとなりました。メシアの体は、今日における神の住まいです。イェシュアはレビ族の人間的な祭司ではない、真の大祭司です。そして、人種的なユダヤ人だけでなく、すべての人が神を深く知ることができるようになりました。これらのことはすべて確かに真実ですが、それによって、将来の土地の約束は無くなってしまうのでしょうか。これら２つの命題は、二者択一なのか、それとも両立するのでしょうか。新約聖書の言葉は、これらの預言者たちが言ったことは計画の一部に過ぎないと(使徒 3:18-22)述べており、約束の成就者であり執行者であるイエスも、民族の希望を示しておられる(ルカ 13:34-35)のですから、私たちはそれを考慮に入れるべきではないでしょうか。また、これらの書の著者たちが示した美しいたとえ話が、それぞれに全体の一部であることを喜ぶべきではないでしょうか。

さらに重要なのは、約束の成就者イエスが使徒たちに次のように宣言された言葉です。「世が改まって人

の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」（マタイ 19:28 新改訳）。イエスの言葉を普通に読むなら、ここで語られているのは識別可能な人々と十二部族から構成される民族のことです。王の支配は、彼（および使徒）がその権威を行使する世界の国々を含む支配地域を想定しています。聖書の言葉は、ユダヤ人とイスラエルという国の未来を強調しているのです。

結び：宣教の召しは続いている

イスラエルに関する聖書の議論は複雑ですが、大宣教命令がすべての国のすべての民族を対象にしていることは明らかです。ですから、ユダヤ人伝道は教会の召しの一部です。ユダヤ人がキリスト教の信仰と歴史的、神学的に深く結びついている特別な民族であるにもかかわらず、教会に起こってくる多くの問題の影響で、ユダヤ人伝道が置き去りにされることを、ＬＣＪＥは懸念しています。イエスはメシアとしてイスラエルに来られましたが、それは彼の民に福音を伝えるためでもありました。それは、ユダヤ人たちがいくら福音を拒否する姿勢を取ったとしても、変わることはないのです。
神は常にイスラエルの中に「残りの者」を起こしておられました。だいたい、全ての民族は最初は神に逆らっていたのに、神は手を差し伸べてくださったのです。メシアへの信仰の神学的根拠を理解すれば、教会の召命の、この側面に対する熱意が失われることはありません。教会の召命についての神学的根拠と私たちの信仰の歴史的背景を考えれば、私たちはユダヤ人を導くことに関心を持つべきです。彼らの神との和解は、救いと回復の包括的な神の計画の基本になるからです。次の４章では、人々がユダヤ人伝道に対して提起する多くの実際的な反対論を取り上げます。また、最後の５章では、大宣教命令のこの側面を実行するために、現在における宣教の機会と、進行中の宣教戦略を取り上げます。

2023 年 3 月 1 日
（石井田直二翻訳）

第４章：ユダヤ人伝道に対する１０の反論への応答　–リチャードハーベイ博士

Chapter 4: The Top 10 Challenges Facing Jewish Evangelism and How to Respond
–Dr Richard Harvey
英語本文へのリンク

1・難しすぎる！　It's too hard!
2・私にはユダヤ人の友人がいません　I don't have any Jewish friends.
3・答えがわかりません　I don't know the answers.
4・私は反ユダヤ主義になりたくありません　I don't want to be antisemitic.
5・ユダヤ人とクリスチャンの関係が悪くなる　It's bad for Jewish-Christian relations.
6・伝道しないようにと言われました　They have asked us not to evangelize
7・効率が良くない、費用がかかる　It's not cost effective.
8・イエスが帰って来た時に彼らは皆信じるでしょう　They'll all believe when Jesus returns.
9・彼らはモーセの律法を守ることで救われます　They are saved through keeping the Law of Moses
10・結論：答えよりも多くの質問？　Conclusion: More questions than answers?

第５章：ユダヤ人伝道における戦略と実践

–スーザン・パールマンとアンナ・ベス・ハヴナー
Chapter 5: Strategies and Initiatives in Jewish Evangelism
–Susan Perlman with Anna Beth Havenar
英語本文へのリンク

・古典的な戦略　Classic strategies
　・弁証学　聖書翻訳　聖書の配布　Apologetics　Bible translations　Bible distribution
・地理を基にした戦略　Geography-based strategies
　・イスラエル国外のイスラエル人　Israelis outside of Israel　イスラエルのロシア系市民　Russians in Israel
・特別な社会集団　Unique demographics
　・超正統派コミュニティ　Haredi communities
　・ユダヤ人学生のミニストリー　Jewish student ministry
・季節的 Seasonal　祭の食品配布　Holiday baskets
・二重のアイデンティティ　Dual identity
　・LGBTQ とユダヤ人　LGBTQ+ Jews
　・ユダヤ人と異邦人のカップル　Jewish-Gentile couples
・デジタル伝道　Digital evangelism
　・ポッドキャスト、　チャットミニストリー、ＳＮＳソーシャルメディアでの交流、デジタルコンテンツ　Evangelistic podcasts　Chat ministry　Social media engagement　Digital content
・放送　Broadcast
　・ラジオ　テレビ　映画　Radio　Television　Film

・人道支援活動　Compassion strategies
　・貧しい人々、麻薬中毒者　Ministry to poor and addicts　診療所　Medical clinics
・その他のアイデア　Other creative venues
　・喫茶店　視覚芸術と舞台芸術　ゲストハウス　カウチサーフィン　Coffee shops　Visual and performing arts　Guest houses　Couch surfing
　・キャンプミニストリー　子どものミニストリー　Camp Ministry　Children's ministry
・ユダヤ人伝道団体間の戦略的協力　Partnership as a strategy for Jewish evangelism
　・宣教師を互いに出向させる　共同プロジェクト　文書類の相互利用　社会活動との連携　Social justice　Congregational approach　Business as mission
　・コングリゲーションとの連携　事業を通じた伝道　Seconding workers to one another　Joint projects　Utilizing one another's materials
・未来に向けて　One last look at strategy–a glimpse into the future
　・今後のユダヤ人の伝道を想像する Imagine Jewish evangelism going forward…
・まとめ　Conclusion

参考文献：さらに学びを深めるために – リッチ・ロビンソン博士

For Further Reading –Dr Rich Robinson
英語本文へのリンク

・イスラエル、シオニズム、および置換神学　Israel, Zionism, and Supersessionism
・ユダヤ人宣教団体と伝道活動　Jewish Missions and Evangelism
・イエスのユダヤ性　Jesus
・キリスト教神学と実践のユダヤ性　The Jewishness of Christian Theology and Practice
・護教論　Apologetics
・メシアニック運動　The Messianic Jewish Movement
・聖書注解　Bible